
Sword Of Magic Online

一二 三四五

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Sword Of Magic Online

【Nコード】

N5405Y

【作者名】

一二三四五

【あらすじ】

高校1年の漆原崇は夏休みに友人と従妹にハメられてオンラインゲーマーになることになった。そして始まるSword Of Magic Online。剣と魔法の異世界で、少年たちは何を手にし、戦うことになるのだろうか。

1（前書き）

初めまして。一二三四五と申します。

初の小説で、初の投稿で、色々見苦しい所もあるかもしれませんが、また、この小説はVRMMOモノです。

今の所デスゲームや転生みたいな事も書こうかと思っていますが、何分初心者なもので、技術不足です。書けたらいいですね。

日常も入りたいと思ってます・・・が、書けるかどうか分かりません。

そのくらい初心者です。

俺の名前は漆原^{うるしばら} 崇^{たかし}。県内の公立高校にこの春合格し、その公立高校に通う高校1年生だ。

今時珍しく毛も染めずに黒髪を貫き通し、がり勉の代名詞でもあるメガネをかけているためか中学の頃は少しいじめを受けていたが、幸いにも高校進学と同時にそれは無くなった。

身長は187cmで新入生の中で一番に背は高いが、視力は両目共に眼鏡をかけてギリギリ1.0、裸眼で0.5だ。

そして今日は7月19日。明日から高校生活最初の夏休みだ。

終業式が終わり、担任からありがたい言葉と夏休みの宿題を貰い終わった後の帰り道、後ろから声をかけられた。

「よう、崇る」

崇る——。これは俺の渾名^{あだな}だ。

「崇^{たかし}という字が崇る^{たたる}に似てるから」、そんな理由で付けられた。

「よう、心太^{こころた}」

「心太じゃねえよ！心太郎^{しんたろう}だ！」

心太と呼ばれた茶髪の男は、同級生で幼馴染^{くされえん}でもある谷口^{たにくち} 心太郎^{しんたろう}。毛染めはしていない生まれつきの茶髪だ。身長は俺より小さいが172cmでそこそこ高い。

小学校高学年辺りから気付いたんだが、心太という字は「ところでん」と読むのだ。

当時その事に気づいた心太郎は国語の授業中に叫んだ。

それ以来心太郎は心太と呼ばれるようになった。俺は「崇る」と言われた時かム力ついてる時くらいにしか呼ばないが。

「それで・・・何の用だよ？」

「明日からは楽しい楽しい夏休みだろう。せつかくだし、ハム兄さん家にゲーム合宿しようぜ」

ハム兄さんというのは、岡本 公彦。6歳上の幼馴染だ。

何故「ハム兄さん」か。別に太っているわけではない。公という字を幼い頃に「ハム」と読んだ時の名残だ。

「ゲーム合宿ってお前、宿題はどうするんだよ」

夏休みに欠かせない「宿題」。観察日記のような長期的な物から、問題集のような数十分で終わる物など様々だ。

高校にもなれば観察日記は無いが、かわりに読書感想文というものが出てくる。

出来が良いと、夏休み明けの文化祭で発表に繋がる。発表できれば図書券を貰えるが、全校生徒の前で発表するのはさすがに恥ずかしい。俺には全校生徒の前で発表する度胸は無いから手は抜くが。

「そんなもん後だ後。どうせ出さなくても明けのテストで挽回すりゃいいんだよ」

「・・・で、なんでハム兄さん家なんだよ」

「ハム兄さん家にはVR機があるんだよ！しかも8台もだよ！」

VR機というのは、VRゲームができる、家庭用据置機。シャワールームくらいの大きさの個室の中にイスとパソコンを設置したようなものだ。

仲はゼリー状になっていて、このゼリー状の温度は可変で、夏はひ

んやり、冬はぽかぽか遊べるというわけだ。

温度は内側から変えるので、閉じ込められて夏に蒸され、冬に凍えさせられ、なんてことはカギを閉め忘れない限り無いと言っている。

「それで・・・？やるゲームは何か決まってるのか？」

VR機はオンラインゲームもできるが、オフラインでも問題無くできる。

とはいえ俺はソフトは持っていないし、オンラインゲームもやっていない。

心太郎はオンラインゲームを主にやっていて、ハム兄さんも同じなので、結局はオンラインゲームになる。

「ふっふっふ、実は明日からオープンβのソードオブマジックオンライン、S o M o^{ソモ}というのを見つけてある」

「ソモ？」

「S w o r d O f M a g i c O n l i n e の略だ」

「・・・ソーマジじゃないのか？」

「まあそう略す人もいると思うが、S o M o が公式な略称だ。運営スタッフもそもそも言っている」

心太郎は自慢げに話している。おそらく前のβテスト、クローズドβに参加したんだろう。

こいつのことだ、きっと廃人並にプレイしているに違いない。

なんせGWの登校日を「ゲームやってて忘れてました」と言ってきた奴だ。おそらくその頃に前のcβ^{クローズド}があったんだろう。GW明けに「神ゲーを見つけた！」とか言ってたしな。

「ま、明日から頑張ろうぜ！」

心太郎は俺の背中をたたき、笑顔で夕日に向かって走り去っていく。俺は苦笑いをうかべて手を振ってさよならを告げる。そして、俺は同時にある事に気付いた。

「あ、やべ、話に夢中で家通り過ぎてた・・・」

心太郎の家は俺の家から少し離れた所にあり、俺は話に夢中になるとよく通り過ぎる。

帰った時に姉から「あんたまた通り過ぎたね」とにやにやしながら言われた。

親に明日からハム兄さんの家に泊まる事を言って、風呂に入って晩飯食べて寝た。

7月20日。夏休み初日である。

目を覚ましたら目の前にすごい笑顔の心太郎の顔があつた。

このまま顔を上げたら大変な事おそろしいことになるので払いのけて起き上がる。

「おーっす、祟る、いやー、良いゲーム日和だな!」

「ゲーム日和ってなんだよ・・・」

「今日は午前中晴れ、午後から雨だ!雨じゃあ家でゲームするつきやないもんな!」

「ああ、そう、テンション高いな、朝から」

心太郎は何故か朝早くから俺の部屋にいる。時刻は午前6時。

目が覚めたら目の前には心太郎の顔という最悪の朝だ。

心太郎が女の子だったら俺も立派なラノベ主人公なのにな、現実は甘くない。

「よし、じゃあ行こうさあ行こう行こう」

「少しは待てよ・・・サービス開始何時だよ・・・」

「朝10時だ！あと4時間しかないんだぞ！」

「あと4時間もあるんじゃないかねーか・・・」

リビングに行き、心太郎と一緒に朝食を食べる。

後から起きてきた親が「崇が朝早くから起きるなんて槍でも降るんじゃないか」と茶化してきた。

「崇君どこかいくのー？」

従妹の篠原しのはら 茜あかねがパジャマ姿でリビングに現れる。

姉と同じ髪型で黒髪ロングなのにどうしてこつても可愛く見えるのか。おそらくは身長140cmくらいだからだろう。

こんなナリで中3である。合法ロリという言葉が似合いそう。まだ非合法的な年齢だが。

「ところてんおはよー」

「おう、茜ちゃんおはよう」

「おい心太、醤油取ってくれ」

「俺を心太と言っているのは茜ちゃんだけだゴルァ！」

そう言っても取ってくれる心太郎は良い奴だ。と思う。

しかし「心太」が茜専用ねえ・・・。

「・・・姉さん」

ニヤリと笑って姉を見る。姉も笑顔で返す。俺の思いは通じたようだ。

「心太、塩を寄こせ」

「ハイッ！」

元氣良く塩を取る心太郎。

「あれあれ？茜だけじゃなかったのかな？ん？」

「^{あんず}杏さんと茜ちゃんだけだ」

ふっ、と笑い食事を続ける。

食事を食べ終わったので、部屋に戻りカバンを取りに行く。
用意は夜の内に済ましてある。

窓の外を見ると、茜と心太郎が手を振って待っている。

「って茜！？お前もやるのか！？」

「あつたぼうよー」

「実は先に茜ちゃんを誘ったんだが、崇るも一緒じゃないと嫌だと
言うんでな」

「俺が後かよ、最初から茜目当てですかこのヤロー」

「安心しろ！俺は崇るも誘っただろ！」

「というか崇君がいないとこの計画成り立ちませんし」

「茜ちゃん、シート！」

計画って何だろう、どうせ聞いても教えてくれないんだろうし、さ
つさとハム兄さん家に行こう。

そんなことを思いながら、3人でハム兄さん家への道を歩く。

この時は、まだ、あんな事になるだなんて思ってもいなかった。

ピンポン。

朝っぱらから鳴り響く機械音。

近所迷惑にならないのだろつかとヒヤヒヤしている俺をよそに、心太郎はわくわくしながら扉からちよつと離れたところで待つ。

しばらくすると玄関から一人の青年が顔を出してきた。

肩まで伸ばした茶髪、目を開けているかわからない細目。

「漢魂」とよくわからない言葉書かれているシャツを着ている。

「やあ。おはよう、崇君、心太郎君、茜ちゃん」

この人がハム兄さん。岡本 公彦である。

「おはようございます!」

心太郎は朝だというのに大きく挨拶し、

「おはよーございまーす」

茜は間延びした感じで、

「はよっす」

俺は色々略した挨拶をする。

「うん、みんな元気良いね。それじゃ、あがってあがって。10時まで計画を練ろっ」

計画とはついさつき心太郎と茜が話していた事だろうか。
一体何を企んでいるのやら、と、そんな事を思いながらハム兄さんの家にお邪魔する。

玄関から入って、最初に見える部屋にはVR機がチラツと見える。

「さ、好きな席に座って」

俺は2番機に座る。何故2番か、1番はいつの間にか心太郎が座っていたからだ。

テンションの高さは瞬間移動まで可能にするのだろうか。

3番には茜が、4番にはハム兄さんが座る。

会話は専用の会話ソフトを使っているので、わざわざVR機を出る必要は無い。

「じゃあ、早速Wikiを見て、今後どう動くかを決めよう。茜ちゃんや心太郎君はクロースドβテストに参加していただろうけど、崇君は参加していなかったからね」

ハム兄さんによれば、茜もクロースドβテストに参加していたらしい。心太郎のような異常ではないが。あそこからはんまで

Wikiと言うのは、攻略サイトのようなもので、色んな人が情報を書いているウェブサイトだ。

色んな人の中には荒らしも含まれ、攻略情報を見ようとしたら出会い系サイトに繋がった、というものもある。

俺も何度かひっかったことがある。

「ハム兄さん、崇がWiki見てる間公式掲示板見てていいか？」

「んー、まあ僕と茜ちゃんが崇君に説明してる間ならいいよ。ただし、後でちゃんと参加してね」

「了解！」

「じゃあ、早速このゲームについて説明しようか。」

このゲームの名前は `Sword Of Magic Online`。剣と魔法のファンタジーなゲームだ。

まあ、そう時間も無いし、世界観についてはゲームをやりながら触れるでしょう。」

ハム兄さんは画面の時計を指さす。今は8時30分。家を出たのが7時30分だから、もう1時間も経っている事になる。そして残り1時間と30分。その間に計画とやらを練って、10時のプレイに備えるというわけだ。

「じゃあまず【初心者のおすすめ】という項目を見よう。30分もあればだいたいわかるはずだ」

ハム兄さんの指示通りに【初心者のおすすめ】という項目を見る。ずらりと並んだ文字列にちよつとばかり驚くが、スクロールして見ると意外と少ないようだ。不必要な情報は削っているのだろう。

1. キャラ作成のススメ

このゲームでは最初に3つのセンス（才能）を選ぶことから始まります。

初心者のオススメは大剣、重装備、スタミナです。

近接

- ・大剣

攻撃力が高く、初心者にオススメ。

重いので重装備と合わせることで初心者でも安定して狩れます。

- ・重装備

防御力が高く、初心者におすすめ。

軽装備、標準装備もありますが、防御力の上昇値が低いいため実質的な死にセンスです。

- ・スタミナ

重要 最大SPを上げます。

このセンスが無いと、スキルを連発できません。絶対に取得しましょう。

「魔法職なら杖、重装備、マナだね。マナは最大MPを上げるんだ。魔法職で重装備って少しおかしいと思うかもしれないけど、重い武器や防具の方が高性能で強いんだ」

「ゲームとは言え、おかしい話ですね」

「うん・・・まあ、ゲームだからね。でも、オープンβではどうなるかわからないよ。噂では、重装備にデメリット追加と、軽装備にメリットが追加されるらしいからね」

「Wiki見る意味ってあるんですか・・・？」

「まあ、前のテストの情報とはいえ、役立つこともあるさ・・・そうそう、センスは3つまでだけど、ランダム選択ってボタンを押せば5つまで取得できるんだ。ランダムだから死にセンス5つとか

も有りうるけどね」

つまり堅実に3つのセンスを選択するか、運試しも兼ねてランダム選択を選ぶかってことだ。

ランダム選択の中には通常では選択できない希少^{レア}才能というものもあるらしい。

希少なだけに役に立たないセンスもあれば、公式チートと呼ばれるような凄いセンスもあるそうだ。

「次にステータスの説明も見ておこう、さ、もう残り10分も無いよ」

時計を見る。10時まであと1時間と10分。1時間かけてどんな話をするんだろう。おれは心太郎みたいに異常ではないのでよくわからない。

STR：力の強さ。攻撃力、最大重量が上がる。

VIT：打たれ強さ。SPと物理防御が上がり、物理状態異常になりにくくなる。

TGH：タフさ。SPとMPが速く回復する。^{スタン}気絶になりにくくなる。

DEX：器用さ。物理クリティカル率。物理命中。生産スキル成功率が上がる。

INT：魔力の練度。魔法攻撃力、魔法命中、魔法クリティカル率が上がる。

MND：精神力の高さ。MPと魔法防御が上がり、魔法状態異常に

なりにくなる。

LUK：運の強さ。レアアイテムを取得しやすくなり、ラッキークリティカル率が上がる。

AGI：俊敏さ。回避力と移動能力が上がり、攻撃速度と詠唱速度が速くなる。

「物理職ならSTRとVITとDEX、魔法職ならINTとMNDが重要かな。TGHはどちらも重要で、TGHが高ければ少し間を置くことでスキルを何回も使うことができるようになる。AGIもまあ重要だけど、TGHが高くない内に上げててもすぐにガス欠するから後回しでいいよ。LUKはレアアイテムが欲しければ。300や500でようやく目に見えて取得しやすくなるだけだね。ラッキークリティカルはクリティカルのクリティカルみたいな感じかな。クリティカルは2倍ダメージだけど、ラッキークリティカルはさらに物魔防御無視もついてくる」

「ちょ、ちよつとまって、そんなに言われても覚えられねーよ」

ハム兄さんはこれについても「まあ、ゲームをやつてれば自然に覚えるよ」と言った。

国語と英語と数学を混ぜ込んだみたいな内容なのに、自然に覚えられるって、このゲームは魔法が何かなんだろうか。

心太郎も夏休み明けのテストで挽回するとか言ってたし、ひよつとするとこのゲームは遊ぶと頭がよくなる、とかそんな事もあるかもしれない。

「うん、丁度1時間前だね、心太郎君、そろそろこっちにきてくれ」
「は、はい。ちよつと待ってください。あと30秒・・・」

心太郎は何か書き込んでるようで、若干興奮しながらキーボードをカタカタしている。

「顔真つ赤乙w」とか言われたのかな。

しばらくして心太郎が戻ってきたのだろっ、会話ソフトがお知らせする。

そして目の前に会議室のようなものが現れる。さすがVR機、リアルだぜ……。

「じゃあ、会議を始めよう」

ハム兄さんは肘を机に付けて、顎に下に手を重ね俯きながら言う。
グラサンはかけてないし目も開けてないが。

「崇」

心太郎が俺の名前を呼ぶ。

真剣な表情に、俺はゴクリとのを鳴らして次の言葉を待つ。

「ふっ」

心太郎は何かを感じ取ったのだろっ、少し笑い、高らかに宣言した。

「ではここに！漆原崇をゲーム廃人に引きずり込むための会議の開催を宣言する！」

「何を宣言してるんだこの馬鹿は！」

俺は何故か近くにあったハリセンで心太郎の頭を叩いた。

パーン、と良い音が鳴ったが、このソフトは痛覚にまで影響が出ないので問題は無い。

「いやー、崇君のツツコミ冴えてるね・・・」
「さすが私の従兄だね」

ハム兄さんと茜はなごやかムードでそれを眺めている。
ハメられた。どうやら俺はこの3人にハメられたようだ。
しかしそれと同時に、茜もいわゆるゲーム廃人だということに気付いた。いったいいつからやっているのだろう、この子。

「ふっ、腕を上げたな、崇」

心太郎は何故かいい笑顔で俺を褒めてくる。なんの腕だよ。ツツコミか？ツツコミの腕か？嬉しくねーよ。

「で、わざわざゲーム廃人とまで言っつてことはソーマジってそんなに面白いんですかね」

茜や心太郎はS o M o S o M o言ってるが、俺はソーマジの方が覚えやすいからソーマジと言ってる。
多分どっちでも通じるだろうから、俺は言いやすく覚えやすいソーマジと言う。

「面白いよ！」

ハム兄さんに笑顔で返される。

「ハムにーさん、話が長くなるからこのゲームの面白さはひとまず置いておこう。崇君もはやくS o M oやりたいだろうからね」

「いや、少しは期待してるけど、茜や心太郎のレベルまで心躍って

ねえよ」

「え、えー！？な、なんで！？普通心躍るよ！」

なんかびつくりされてる。俺、まだゲーム廃人じゃありませんから一般人ですから。

「まーまー、茜ちゃん、崇はまだ一般人だ、これから染め上げてやるんじゃないか」

心太郎は心太郎で何やらこわいことを言っている。俺は何色に染め上げられるんだよ。

「さつきから脱線してばかりだね、ごめんごめん。とりあえず、僕らは各自別々に行動するでしょう。崇君が一通りできるまではみんなで行動するけどね」

「賛成ーっす。まあ俺もネットの付き合いとかあるからな。何を隠そう、俺は【エディ傭兵団】の副団長様だぜ」

「えー！？【エディ傭兵団】ってあのランカーレギオンですか！？わ、私だって【白薔薇騎士団】の幹部ですよ！」

「かくいう僕は【バスターズ】のレギオンマスターさ。そういうことだから崇君、さっさと覚えてくれると助かるよ」

「え、あ、はい。わかりました、がんばります」

すみません。よくわかりません。その後会議は俺に対するゲーム解説になり、俺のよくわからない言葉が飛び交った。

まず、レギオンっていうのはプレイヤーが複数人集まったら作ることのできるもので、レギオン専用のチャット、メール、掲示板といった各種コミュニケーションツールが使えたり、メンバーの大まかな現在位置、ログイン情報がわかる等便利な特典が付くらしい。その分、作るには莫大なゲーム内通貨が必要らしい。

ランカーレギオンっていうのはレギオンランキング上位10位ギルドの事らしい。

【エディ傭兵団】は5位、【バスターズ】は7位でランカー。【白薔薇騎士団】は11位でランク外らしいが、ランカーに一番近いレギオンと言われているらしい。

その後もハム兄さん、心太郎、茜によるゲーム解説は続いて、多くのゲーム用語が飛び交う会話に、俺はついていけずに、最後の方の解説はあまり頭に入らなかった。

そして解説が終わりそうになると、心太郎が最後に一言。「分からなかったらWikiを見ろ」と言った。

10時、俺たち4人はゲームをプレイする。アカウントは既に作成済み、クライアントもインストールしていたので、すぐに始められた。後で話を聞いたんだが、実は9時55分にはプレイ可能だったらしい。

プレイヤーキャラクター

PC名はTAKASHI、TAKASI共に登録されていたので、仕方なくあだ名であるTATARUにした。後で聞いたことだが、本名で登録するのは実は危なかったらしい。TAKASHIさん、TAKASIさん、ご愁傷様である。

容姿は自動的に読み取られ、画面には俺が映し出される。まるで鏡を見ているようだ。

そして容姿は違和感が無い程度から半魚人のような顔にまで、好きに変えられるようだ、俺は失敗がこわいのでやめておいた。

ただ身長を違和感が無いように少し高めにして、190cmくらいにした。俺の元の身長は187cm、3cm増である。

次にステータスを30P割り振る。
ステータスの最低値は1。とりあえず俺はSTRに9、それ以外に3割り振った。

これも後で聞いた話だが、これは間違った振り方らしい。最初の内はSTRに9P、VITに9P、TGHに9P、AGIに1振るのがテンプレだった。

最後に、このゲームの目玉であるセンス選びだ。

俺は迷ったが、あえてランダム選択を選ぶことにした。

やっぱり5つという数が魅力的だ。

確認画面で決定を押して、俺のゲームは始まった。

俺はこの時気付くべきであったのだのう。

俺のPC名は、TATAR”U”ではなく、TATAR”I”で決定された。

初歩的なタイプミスである。

ゲームが始まる。

俺はSword Of Magic Onlineの大地に立ったのだ。

まるで現実^{リアル}のようだが、ゲームである。

最先端の技術で作られたのだろう、いつもやっているオフラインゲームとは違い、本当に現実のように見える光景に、身を震わせる。

「タタルさん」

眼前に広がる素晴らしい景色を堪能していると、声をかけられた。

そちらを振り返れば、若干心太郎や茜やハム兄さんの面影を感じる3人組がいた。

「おー、心太郎、茜、ハム兄さん、久しぶり！」

「久しぶりってさっき会話したばかりだろうが。というか本名出さなコラ」

「そーだよー、気を付けてねー、タタルさん」

「ああ、ごめん、アカリ、シン、ハム」

ちなみに「AKARI」「茜」「SIN」「心太郎」「HAMU」

「ハム兄さんである。ゲーム内でスムーズに会えるように、名前を前もって聞かされたのだ。

俺も名前は「TAKASHI」か「TAKASI」か「TATARU」にするとっておいた。

どうやらクローズドβの特典で、名前データだけはそのまま引き継ぎができたらしい。

故に、

「あ、副団長久しぶり！」

「アカリちゃんちよりーっす。夏休み入ったかな？」

「ハムさん久しぶりです！一緒にゴ布林狩りにいきませう！」

このように、俺の知らない色々な人から話しかけられている。

シンに呼びかけたのは金髪の女子中学生つばい人、アカリに呼びかけたのは青髪のOLつばい人、ハムに呼びかけたのは男子小学生つばい人だ。

つばいって言ったのは、身長と顔立ちでそう見えたからだ。容姿は変えられるのを知っているので、つばいって言った。実は男子小学生つばい人がおじいさんかもしれないのだ。さすがに無いと思うけど。

「悪い、ちよつとりア友を汚染させるのに忙しいから、また今度な」

シンはちよつと物騒な事を言って、

「入ったよー！これから初心者さんにレクチャーしてあげるのだー！」

アカリはちよつとテンション高めに、

「初心者支援した後行きまっ」

ハムは変な語尾にして、話しかけてきた人たちと別れる。

俺はその間キョロキョロと辺りを見ていたので、きつと俺がその初心者だと思ったんだろう。

その後、俺はシン達に連れられ、初心者平原というところに来た。見渡してみると色んな人がゴブリンらしき敵を殴っている。軽く血も出ている。R - 15 指定だ。

「ここは初心者平原。その名の通り、初心者向けの低レベルで高経験値のモンスターが出る。さて、俺たちもPT組んでゴブリン狩りだ！」

言われるがままにPTを組む。

「あれ？タタ“リ”？」

ふいに、アカリが何か言った。たしか、俺の名前は「TATAR」だ。

間違いを指摘しようとしたが、俺もPT欄を見て気付く

「あ、打ち間違えた。「TATAR」I」になってる」

「凡ミス乙です！」

「凡ミス乙でっ」

「バーカ！」

俺、アカリ、ハム、シンの順である。

ムカついたのでシンを殴ろうとしたが、「PK禁止エリアです」と出て殴れなかった。

PKというのはプレイヤーキルの略で、その名の通りPCを殺す事だ。

このゲームでは初心者PK防止として、特定のエリアと一定レベル未満のPKを禁止しているそうだ。

「まあそれはさておき、タタリ、何も持っていないようだけど、センスは何にしたんだ？」

「ああ、ランダム選択にしたよ。まだ見てないけど」

「はあ！？ランダム選択！？地雷じゃねえか！」

「ランダム選択かー、良いの出ていいんだけどね・・・」

「まあダメでも今ならまだ修正可能でつよ」

散々な言われようである。ステ振りの事も言ったら全員に呆れられた。

「まあ、Wiki見る時間も少なかったでつし、それはまあいいでしょう。とりあえずセンスが何か言ってください。武器センスと防具センスを買うにしても、今あるセンスで代用できればそれでいいでつから」

さつきから“です”を“でつ”に言い変えてる事が気になってるが、とりあえず指示に従った方がいいだろう。

俺はセンス画面を開き、5つのセンスを順に読み上げる。

「『無刀流』、『魔法少女』、『釣り』、『料理』、『投擲』、以上です」

「希少センス2つでつか・・・む、しかし『無刀流』でつか・・・」

「せっかく『魔法少女』があるのに『無刀流』かー」

「『無刀流』とか地雷乙」

どうやら『無刀流』というのは凄く良くないセンスらしい。しかし、がついているので一応希少なはずだ。希少の中でも弱いものなのだろうか。

センス一覧

無刀流 L V - : 武器を持てなくなる。 S T R、V I T、T G H、A G I、S P、S P 回復能力が5倍になる。

魔法少女 L V - : 魔法少女に変身できる。

釣り L V 1 : 釣りができる。

料理 L V 1 : 料理ができる。

投擲 L V 1 : 物を投げるのが上手くなる。

5倍という数字が目に入る。

多分だが、これは凄い数字なんじゃないか？クローズドβでは弱かったが、オープンβで調整された、ってことだったかもしれない。

「無刀流ってそんなに悪いものなのか？なんか S T R、V I T、T G H、A G I、S P、S P 回復能力が5倍って書かれてるんだけど・・・」

しかし、さっきのみんなの反応でなんだか不安になってくる。しかし上昇量は物凄いはずだ。ハム兄さんも「5倍」という言葉にちょっと驚いている。

「5倍でつか、クローズドβの時は2倍でしたから、凄まじい上方修正でつね・・・。と言っても、修正される方向間違ってると思うんでつが。しかしその分、無刀流には凄まじいデメリット、武器が持てなくなる、というのがあるんでつ。そうになったら最後、いくら武器センスを磨こうが無駄になってしまいうんでつ。転職試験で武器

を扱う職業にもなることができません」

「まあ、一応拳センスっていうのが残ってるんだけどね……。職業も格闘家っていうのもあるし……」

「まあ、拳センスも格闘家もWikiに載ってるくらいの地雷なんだけどな」

不安が現実になる。武器を持たなくなるのはかなり辛いらしい。「虫を素手で潰せる？鉄を殴れる？」と言われると妙に納得してさらに落ち込む。

俺はこのゲームでやっていけるのだろうか。それはまだ、わからない。

落ち込んでいると、ハムが声をかけてきた。

「でも、『魔法少女』は魔法職としては喉から手が出るほど欲しいセンスでつ。『魔法少女』は補正もクロースドβ時で2倍でつから、もしかしたら『無刀流』と同じで5倍になってるかもしれないでつ。だから、『格闘家』になりつつ魔法職の仕事をする、という事もできるはずでつ」

「ハム・・・」

「タタリ君、頑張るでつよ」

うう、涙が出てきそうだ。俺にもできることがある。ゲーム開始からまだ30分も経っていない俺は絶望を経験したが、なんとか立ち直れそうだ。

「盛り上がつてるとこ悪いけど、それなら『拳』センス買ってこようぜ。確か『拳』センスって100ゴールドだったよな」

「うん、他の武器センスの10分の1の値段ってことは覚えてるよ」

お得なのか、弱いから安いだけなのかよくわからないが、100ゴールドなら最初に持っている150ゴールドで買える。よかった、本当によかった。

「まあ、これも初心者支援だ。『拳』センスとついでに『軽装備』センス買ってくるわ。こん中じゃ、俺が一番AGI高そうだしな」
「ああ、そういえばシン君は『軽装備』でしたね。僕とアカリちゃんは『重装備』でつから・・・ハイ、お金渡しときまつ」

「タタリさんー、シンさんにゴールド渡してー」

言われた通りにシンにゴールドを渡す。150×4でシンは600
ゴールド持つてる計算だ。

「『軽装備』がたしか500ゴールドだから……。うわ、ギリギリだな」

なんだか凄く申し訳ない気持ちになる。

「じゃ、ちょっと行ってくるわ。アカリとハムはその間ゴブリン狩つといてくれ。タタリは……。魔法少女にでも変身して待っていてくれ」

魔法少女という言葉聞いて近くでゴブリン狩りしていた集団がこつちを見る。おそらく彼らもクロードβ参加者のだろう、彼らは手際良くゴブリンを殲滅してこつちに來た。その間にシンは町へ行ったのだろう、遠くにシンが見えた。

「今魔法少女と聞いたんだが、ひょっとして希少センスの『魔法少女』か？」

「あ、はい、そうです」

「おお、そうか。もしよければ見学していいか？何分都市伝説のようなセンスでな、是非とも見てみたいんだ」

「はい、いいですよ」

都市伝説のような希少センスか……。ハムも喉から云々言ってたし、希少センスの中でもかなり希少なだろうな。

話しかけてきた男は「GIGANT」と言う名前で、その名の通り200cmはありそうな身長で俺達を見下ろしている。背中には鎧を背負っている。上着は脱いでいるのだろうか、半裸だ。

髪は・・・無い。ハゲな人なのか、容姿を変えた人なのか、俺にはわからない。

ギガントの他には、俺と同じくらいの身長で、片手に剣を持った緑髪の「EREA」。160cmくらいの女で鎚を両手持ちしている赤髪の「RINGO」、最後に170cmくらいの女で腰に短剣らしき鞘を2つつけている、青髪の「WINDHI」である。

GIGANT達とはお互いに自己紹介を済ませ、早速変身することになった。

「俺はギガント。大鎚使いの『ハンマーファイター』志望だ。で、こっちの緑髪の男はエレアだ」

「どーもー、ワイはエレアいます。いやー、まさか魔法少女の変身シーンが見れるなんて感激ですわ。あ、ワイは片手剣使いの『マジックファイター』志望や」

「はいはい！私はリングゴという名前です！英語だとアップル！大鎚使いの『クレリック』志望です！」

「ウィンディ。短剣使いの『ビーストティマー』志望」

ウィンディ以外の面々はテンションが高い。

ギガントは胸の前で腕を組み、今か今かと待ち望んでいる。

エレアはワクワク、と言った感じだろうか。軽くニヤリと笑っている。

リングゴは両手を上げたり下げたりして忙しそうだ。

ウィンディは・・・、表情が読めない。リングゴのそばで棒立ちしている。

「じゃあ、変身しますよー」

俺はそう言い、『魔法少女』センスで覚えるスキル、『魔法少女変身』で変身を開始する。

すると俺の体は青い光に包まれ、縮んでいく。

「（う、うお！？ま、まさか”魔法少女”になるのか！？・・・まあ、男の姿のままで魔法少女コスチュームになるっていうのもアレだけど、これはこれで恥ずかしい！）」

アカリより少し小さい、130cmくらいだろうか、それぐらいまで目線が下がる。そして青い光はそのまま体の線に合わせるように形を変え、全裸の少女のシルエットが浮かび上がる。全身タイツみたいで凄く恥ずかしい。周りを見てみると、ギガントとエレアが食い入るようにつめている。これが目的か、変態どもめ。

しばらくすると、光がおさまり、光の中から青を基調とした白いフリルのついた服を着た少女が現れる。浅葱色でショートカットの髪、眼は濃い青、顔立ちは少年的な印象の少女だ。肌は白い。肌まで青かったら絶叫していた自信が俺にはある。

「ふむ。変身できたようでつね。・・・ステータスはどうでつか？」

「えっと、はい。・・・おお！INT、MND、LUK、DEX、MPが5倍になってます。予想的中ですね」

「おお！凄いでつね！それなら『無刀流』のデメリットなんて帳消しにできまっしょい！いやー、それにしても、5倍とはすごいでつね。

開発チームは一体何を考えているのか・・・、『マナ』や『精神保護』のセンスが霞んで見えまっしょい！」

『精神保護』、というのはMNDが上昇するセンスだったと思う。確かに5倍と比べたら、2倍3倍は霞むだろうな・・・。

「おい、ハム、そんな事いいじゃねえか、それよりも見ただろう今の变身シーン！完璧な魔法少女の变身シーンだ！いやあ、このゲームやっていてよかった！最高だ！」

「そうやで、あの变身シーン、開発チームGJ！」
グッジョブ

ギガントとエレアはこんな調子で盛り上がっている。

アカリやリングゴは「かわいい」を連呼している。俺は男ですよ。今は魔法少女だけど。

ウィンディはさっきから俺の頭を無言で撫でている。表情に出ないけど、どうやら本質はギガント達と同じな感じた。ブルファスコってやるうか。

「ただいまー。『拳』と『軽装備』買ってきたぞー、使えー」

そうこうしている内にシンが帰ってきた。ウィンディはまだ俺の頭をなでている。いい加減離れてほしい。

「うお！？タタリがハゲの筋肉巨人に変身してる！？」

「おい、それはギガントだ、タタリは俺だ、俺」

あるうことかギガントと間違えられた。俺とアカリ以外にもこの場に女性は2人いるだろ。

アカリとキヤーキヤー言ってるリングと、変身以降俺の頭をずっとなでているウィンディだ。

エレアは「認めねえ！こんな筋肉達磨が魔法少女だなんて俺は認めねえぞ！」とノっている。

ギガントのPTも結構面白そうだ。

俺に気付いたシンは、子供に笑いかけるようににつこり笑いながら腰を屈めて俺に話しかける。

おい、アカリも似たような背だろ、おい。

「いやー、すまんすまん。ほら、これが『拳』センスボックスと『軽装備』センスボックスだ」

ウィンディの手を払いのけ、シンから箱を貰う。なんかけっこうズッシリくる。アイテム欄を見れば5kgとか書かれてる。なにこのおもさこわい。思わずジト目になる。

「センスボツクスって意外と重いんだな・・・」

そう思っていたはずが、いつの間にか声に出ていた。それぐらい重かった。2つ合わせて10kgだ。今の俺なら20kgくらい持てそうだが、重いものは重い。

何時までも持つているわけにはいけないので、さっさと使って楽になろう。

使い方は簡単で、この箱を自分の胸に押し当てる。するとズブズブ沈むように、俺の体に箱が入ってくる。最後まで入ったことを確認して、次の箱を入れる。

このなんとも言えない異物感がクセになるプレイヤーもいるらしい。そうはなりたくないものだ。

最後まで入ったのを確認して、センス画面を開く。『拳』と『軽装備』が追加されている。成功だ。

その後、ギガント達とはフレンド申請を送りあった後別れた。

フレンド申請というのは、ようは「友達になってください」というもので、申請に承諾してもらいフレンドになれば、ショートカットから個人チャット（1対1で話すチャット。テルチャット、テルとも言つ）で話したり、ログイン情報を確認できる。

別れ際にはウィンディが名残惜しそうにしていた。どうやら俺が気に入ったらしい。

「これでようやくスタート地点か。じゃあ、さっさとゴブリン狩るぞ」

「おう。ところでみんな、みんなのセンス構成って何なんだ？」

「ああ、俺は『大剣』、『軽装備』、『スタミナ』だな。『軽装備』

にA G Iボーナスが追加されたようで、意外と合うみたいだぜ、この組み合わせ」

「私は『双剣』と『重装備』と『スタミナ』かなー。重装備だから、タンクになれるよー」

「僕は『杖』、『重装備』、『マナ』だね。でも、S I N君みたいに後で『軽装備』に切り替えるつもりでつ。なんだって、重装備にマイナスA G I補正がかかったからね」

まだ分かりきってないのに説明を求めるのは、早すぎたようだ。ハムとアカリとシンは『軽装備』か『重装備』かで色々話し合ってる。

そういえば、俺は『軽装備』なんだよな・・・

適当に辺りを散策していると、モンスターが近づいてきた。ゴブリンが5匹。1人1体ずつ対応しても1匹余るので、シンとアカリが2人で3体のゴブリンと戦う事になった。俺とハムは1匹ずつゴブリンと戦う。

「くっ」

いきなりゴブリンが飛びかかってきて、ゴブリンの持つ短剣が頬をかする。痛みは感じないが、H Pが1/10くらい減った。単純に考えて後9回ほど当たれば俺がやられる。

俺は反撃とばかりにゴブリンを殴る。・・・ゴブリンのH Pが極僅かに減った。おそらく1/50くらいだろう。

つまり、このまま殴り合ったら俺がやられる、というわけだ。

「無理ゲーなんだけど!？」

思わずそう叫ぶ。するとシンが振り返る。シンとアカリはもう1匹倒したようで、今は1人1匹ずつゴブリンと戦っている。

「お前仮にも魔法少女だろ！魔法使って戦え！」

すっかり忘れてた。この身は魔法少女、魔法が使えぬはずが無い。しかし杖^{ステッキ}無しでも魔法は使えるのだろうか。俺の知ってる魔法少女は杖を振って魔法を使っているんで、いまいち使える気がしない。だが、使えないと俺が耐久的に死ぬ。いざとなればシン達が助けてくれるかもしれないが、そうなったら俺は「1人じゃ雑魚^{ゴブリン}ともまともに戦えないやつ」になり、足手まといに成り下がってしまうだろう。そうなることは避けたい。

スキル画面を開けば「T A T A R I」の横に「魔法少女」というタブがあった。そのタブから魔法少女のスキルを見る。この間に俺は3回ほどゴブリンに斬りかかれる。操作中くらい待ってくださいゴブリンさん。

「ええいままよ！『クリアブレット』！」

ゴブリンに向かって両手をつき出し、スキルを発動させる。

すると右の手のひらから青い光が出る。光は1秒ほどその場でとどまった後、ゴブリンに向かって飛びだした。左手を出す必要は無かったようだ。

ゴブリンはもう一度俺に斬りかかろうとしていたようで、顔面で『クリアブレット』を受け止める。

ゴブリンのHPが一気に半以下になる。

勝てる！、そう思った俺にゴブリンは斬りかかる。本日5度目の斬りかかりだ。

魔法という遠距離攻撃手段ができた俺には、わざわざ近付く必要な

どなかったので、後ろに跳んでかわす。が、失敗したのか地面に頭を打ち付ける。今のでHPが残り1割です。

「ぐおおおお」

地面をのたうちまわりつつ、ゴブリンから離れる。痛みは無いが、驚きのあまり気が動転する。

「タタリ君、『バックステップ』のセンスが無いと、そういったことの成功率は著しく下がりますよ」

ハムが両手を口の横に当てて言う。どうやら向こうの戦闘は終わったようで、俺とゴブリンの戦闘を観戦しているようだ。

シンは腹を抱えて笑っている。この野郎、昼飯食べる前にボコつてやろう。

「『クリアブレット』！」

右手をゴブリンに向け、魔法を放つ。またも俺に斬りかかろうと向かってきたゴブリンに当たり、残りのHPを削られたゴブリンは地面に倒れる。俺の勝ちだ。

瀕死の重傷を負ってゴブリンを倒した俺はみんなから回復POTを貰って回復して、狩りに戻った。

『拳』センスと『軽装備』センスを買ってもらったうえに、回復POTをもらったので、更に申し訳ないという気持ちになったが「初心者には当然の事さ」と笑顔で言われたので気にしないことにした。

それから30分ほどゴブリンを狩っていると、俺は冒険者Lv10になった。

冒険者は最初のジョブで、Lv10になると他のジョブに転職できる。シン達は効率的に狩っているのか、俺がLv8になる頃にはLv10になっており、俺のために初心者の平原に残ってくれていた。冒険者はLv10まではLvが1上がる毎にステータスポイントが10P貰え、その90Pと最初の30Pをステータスに割り振って基礎能力を決める。

Lv11以降はステータスポイントも貰えないため、上げても特に意味は無い。しかしLv100で超冒険者に転職できるとの噂が流れているので、中にはずっと上げている人もいるらしい。

基礎能力は、10Pごとにレベルアップ時のレベルボーナスが+1される。

10Pならレベルアップで+1、20Pならレベルアップで+2、という感じだ。

俺はというと、

「TATARI」冒険者Lv10

STR:20

V I T : 1 4
T G H : 1 4
D E X : 1 4
I N T : 1 4
M N D : 1 4
L U K : 1 4
A G I : 1 4

こんな感じで凄く無駄にしている。

俺は「各ステータスに10振って、好きなステータスに4つに10ずつ振れ」と言うシンの言葉を「各ステータスに10ずつ振って、余ったポイントを好きなステータスに振る」と勘違いしていたのだ。おかげでLv9になった時に「このままだと10しか余らねえ!」と焦っていたら怒られた。

この数値だとう振っても2つ以上のステータスを20にするのは無理なため、シンに「TGHかAGIどっちかに10振れ」と言われたので、俺はAGIに10振った。ハムとアカリは苦笑いしていた。

レベルアップボーナスは10P毎に決まるので、俺は28P無駄にしている事になる。

ちなみにこのゲームは転職条件を満たしていれば、いつでも好きなジョブに転職できる。

転職条件は、町にいる転職試験官のNPCに話しかけることで受けれる転職クエストをクリアさせる、というものだ。

さらに、ファイターやマジシャンのような下級ジョブはLv100になると、上級専門ジョブのソードファイターやレッドマジシャンに転職できる。

ほかにも、ファイターとマジシャンがLv100だとマジックファイターに転職できるなど、ジョブとジョブを組み合わせることできる。もちろん、どちらも転職クエストをクリアする必要があるが、丁度12時頃だったので、転職兼お昼の休憩をするために町へと向かった。

ソーマジの時間は現実とリンクしているので、こういった時に便利らしい。

もつとも、夜限定のモンスターもいるので、中学生には辛いとアカリはこぼしていた。

—— 始まりの都『アガレス』 転職の館

町に来るのは初めてなので、はぐれないようにシンについていく。しばらく歩いて『転職の館』という所に着くと、シンが話しかけてきた。

「とりあえず、だ。お前は格闘家に転職しろ。と言うかそれ以外に道は無い」

アカリやハム曰く、生産職という道もあるらしいのだが、俺のステータスでは生産職に向かないらしい。

生産職はステータスポイント120全てをDEXに振った生産特化型と呼ばれるものを一流と呼び、後は二流三流らしい。

俺は万遍なく振り、さらには28P無駄にしまったのだからおそらく三流以下だろう。

「わかった」

頷く他無いだろう。しかし、館の隅にいる上半身裸の筋肉男がこわい。どこの特殊部隊員だよ。

アレが転職試験官だとしたら俺は全力で拒否したい。

「あれは格闘家の専門職、と言っても事実上の上位職であるコマンドの試験官だ。今は気にせず、その隣の道着のにーちゃんに話しかける。俺達もその間に転職試験受けとくからよ。試験終わったら、転職の館の前のパン屋に集合な」

「ああ、助かった」

本当に助かった。よくよく見ればあの筋肉男の陰に道着のお兄さんが見える。道着のお兄さんは決して小さくない。あの筋肉男がデカ過ぎるだけなのだ。

シン達はそう言う転職試験官の方に向かって行った。シンとアカリがなるファイターの転職試験官はヘッドギア付けた黒髪のおっさんで、ハムがなるマジシャンの転職試験官はいかにも魔術師といった感じのとんがり帽子のお爺さんだ。

俺もさっさと転職試験を受けてこよう。

「すみませーん」

「オッス！俺は格闘家転職試験試験官だ！何の用だ？」

「転職試験を受けたいです」

「オッス！格闘家になりたいのか。格闘家とは拳で敵を倒す職業だ。極めれば大岩を砕く事も容易いぞ！では、ゴブリンを狩り、証拠としてゴブリンの証10個を俺に差し出すのだ！」

「はい、わかりました」

「オッス！格闘家の道は長く険しいが、この試験は乗り越えれば必ず君の力になるだろう！」

この暑苦しく、「オッス！」と言いまくるのが俺の転職試験官。この上なく暑苦しい。

ゴブリンの証とは、ゴ布林が首にさげているネックレスの事だ。転職試験に必要なアイテムなので、表で100ゴールドくらいで販売している。俺は事前にシンからゴブリンの証を渡されているので、すぐにでも転職できる。

「オッス！どうだ、狩りの調子は！」

「ゴブリンの証集まりました」

というか、最初から持ってます。

ちなみにこの転職試験、簡単だと思うだろうが、1人でやると難しい。ゴ布林は基本的に集団でいるからだ。

ゴ布林5体を1人で狩るのは難しいし、俺でも魔法を使って2体を相手するのがギリギリだ。

なのでクローズド参加者は、初心者の方に行く前にPTを組んでから行くそうさ。

もちろんゴ布林よりも弱い敵もいて、本来ならその弱い敵を狩ってレベルを上げてからゴ布林に挑むのが正しい道らしいが、プレイヤーの間ではPTを組んで狩りに行くというのがテンプレと化しているそうさ。

「オッス！早いな！お前には格闘家の才能センスがあるようだ！おめでとう！これでお前も今日から格闘家だ！」

そして俺は格闘家に転職した。

シン達と待ち合わせのパン屋に入る。シン達は既に椅子に座っていて、俺のためだろう、1つ椅子が空いていた。

「おい、格闘家試験終わったよー」

こっちに気付かせるために、シン達に向かって声を出す。それがまずかったのだろうか、店の客が俺を見ってくる。

「え、あ・・・」

思わず、一步後ずさりしてしまう。

と、そこへ緑色のローブを着た青髪の男が話しかけてきた。マジシヤンだろう、手に杖を持っている。

身長は・・・、180くらいだろう、元の俺より低いくらいだ。

「ちよつと、その君、『格闘家』って・・・？マジで？」

「は、はい」

そう返事をする、青髪の男はあちゃーつと、手を顔にかける。

『格闘家』が珍しいのだろうか。いや、たしかシンが言っていたな、

『格闘家』は――

「『格闘家』って超地雷職だよ。変えるなら今の内だよ」

『まあ、『拳』センスも『格闘家』もWikiに載ってるくらいの地雷なんだけだな』

——忘れていた。俺のセンスの内3つは地雷なのだ。

地雷と言うのは、役にたたず、足を引っ張り、他人に迷惑をかける——そんな意味を持つネット用語だ。

このまま話を勧めれば芋づる式に、無刀流であること、拳センスであることがバレる恐れがある。

どうしよう・・・、と額に汗を浮かべていると、先ほどの声で気付いたであろうシンが近寄ってきた。

「ああ、そいつ俺のツレなんだよ。初心者でね、やりたい事は好きにやらせる方針なんだ」

「お、【エディ傭兵団】のシンか。いやなに、あの『格闘家』と聞いてね。・・・しかし、初心者『格闘家』となれば二重苦なんじゃないか？」

「ステータスポイントも振り間違つて三重苦だな。まあ、方針だ。気にしないでくれ」

ステータスポイントも振り間違つたと聞いて、また店内がざわめく。ごめんなさい、それに『拳』と『無刀流』も加わって五重苦です。

「ちなみに、どういう感じで無駄になったんだ？」

「気付いた時点でSTR20、それ以外14で10ポイント余りだな。どうやったって20にするできるのは2つだけだ。それでAGIに10振らせて、STR20、AGI24、それ以外14だ。無駄になったポイントは28」

「・・・壊滅的じゃないか・・・明日朝一番に作り直す事をオススメするよ」

「だから、方針だつて。ついでに削除もさせない。あのままで行つてもらつ」

「・・・後悔する事になるかもしれないよ」

そう言つて、青髪の男は立ち去つた。
え、何？俺つてそんなにやばいもんなの？

その後、パンを食べてFODDゲージを満たして、店を出る。

FODDゲージというのは、満腹度で、100%あれば全力を出せるが、50%を切れば能力値が半減して、0%になれば餓死して復活ポイントに戻る。というもので、15分毎に1%減る。

つまり12時間と30分でFODDゲージは50%になるので、だいたい12時間毎に食料を食べて回復する、ということである。
ちなみに死ぬと経験値が3%減る。レベルが下がる事は無いが、苦労して集めた経験値であれば悲しみも大きいだろう。低レベルであればリスクは小さいが、効率は落ちるので死ないように注意して狩るのがいいだろう。

さらに、復活しても食料ゲージは50%に戻るだけなので、このゲームを一週間も放置すればそこには何度も餓死したPCが！という事らしい。半月も放置すれば99%たまっていようが0%近くになるのだ。

「じゃあ、飯も食べたことだし、リアルでも飯食つか」

そう言つて、俺たち4人はゲームをログアウトする。

俺はログアウトできたことに、少し安心する。

VR機を出ると、そこにはハム兄さんと心太郎と茜がいた。

「おつかれ、崇君。初めてのVRMMOはどうだった？」

「いやー、けっこう楽しかったです」

「だろ、だろ。まったく、デスゲームなんて都市伝説だっていつも言ってるだろ？心配しなくていいって！」

俺がいままでVRMMOをやらなかったのには2つほど理由があり、それを心太郎に話していた。

1つ目は、これまでのVRオンラインゲームのほとんどが月5000円等、月額課金制だったためで、手を出せなかった。というものだ。バイトはしているが、月5000円というのはさすがにキツイ。しかし、このソーマジは違った。一昔前のオンラインゲームによくある、『基本無料のアイテム課金制』なのだ。

しかし、クローズドβ、オープンβの間は課金アイテムなど無く、ただのテストプレイで、正式に始まってからそういった物を取り入れるのだ。

俺もこれを知ったからには「金が無いから」という理由で断り辛く仕方なく2つ目の、『本当のやりたくない理由』を心太郎に話した。

その2つ目は、俺が『デスゲーム』というものを信じているから、という理由だ。

『デスゲーム』——その話のほとんどは、オンラインゲームに取り込まれた人達が協力して魔王を倒す、原因を見つける、というものだが、その過程の中には『登場人物の死』というものが織り込まれている。

だから俺は、ログアウトボタンが押せて、ログアウトできたことに安心したのだ。

もし、ログアウトできない事になって、デスゲームが始まったらどうしよう。そう朝から思っていた。

しかしそれは杞憂に終わった。ログアウトできたのだ。

「ああ、そうだな、俺の取り越し苦労だったようだ」

「ま、それはともかくとして、飯食いに行こうぜ。どこ行く？ファ
ミレス？」

「私はコンビニ弁当でも可ですー」

と、食事の話題になったが、ハム兄さんが入ってない事に気付いた。
ハム兄さんは苦い顔をしている。ひょっとして、『また』だろうか。

「あー、それに関してだけどね、実は、『また』出たんだ、あの人」

「え！？『また』出たんですか、あの人」

心太郎が叫ぶ。

あの人、というのはハム兄さんの同級生だった人で、今は俺のバイト先の先輩だ。

名前は橋本^{はしもと}幸^{こう}。バイト先では頼りになる先輩だが、1つだけ問題があるのだ。

「神よー！ご降臨くだされー！」

玄関の方から声が聞こえる。

そう、この人、橋本先輩は大の岡本公彦『信者』なのである。

「あの子も昔は普通だったんだけどねー。昔、僕がオンラインゲームを勧めたら空想と現実の区別がなくなっちゃったみたいで・・・『ああ』なっちゃって。」

「ってことは将来俺達も『ああ』なるかも知れないって事ですね・・・」

心太郎が言う。その顔が喜んでいるように見えるのはきつと気のせいだろう。

俺がオンラインゲームをやりたいくない理由の最後の1つ、『バイト先の橋本先輩みたいになりたくない』である。

バイト先では普通に頼りになる先輩なのが、ハム兄さんを前にすると「神！神！」と叫びだすのだ。

ハム兄さんに関わらなければ『普通に頼りになる先輩』だったのだが、関わってしまったがために橋本先輩は『普通に頼りになるけど

たまに変になる先輩』となっているのだ。

「と言うわけだから、今日は家で食べよう。幸いにも冷凍ピザがあるんだ、温めてくるよ」

そう言つて、ハム兄さんは台所に向かう。

この家で料理ができる者はいない。

だからこの家で食べる物は料理ができない者でも作れる冷凍食品だ。この夏休みの間、ずっと冷凍食品ということはないだろうが、朝食、昼食、夜食のどれか1つは冷凍食品になるだろう。

しばらくして、橋本先輩は帰って行つた。偶然にも今日が休みだっただけなんだろう。

あの人の休日はハム兄さんに拝んで始まり、拝んで終わるというものらしい。本人から聞いた。

曰く、『昔妹を神の力で助けてもらったから』らしい。

その妹さんは、一見美少女だが、性格がキツイ。ツンデレで言つとツン10デレ0つてぐらいキツイ。

あの人の笑顔は黒いのしか見たことが無い。昔はかなり荒れてたらしい。ちなみに高校三年生で、俺と心太郎の先輩でもある。

今、俺たちはハム兄さんが持ってきた4種のピザを食べている。シーフード、エビマヨ、カニクリーム、アンチョビの4つだ。

ちなみに俺はアンチョビだ。蟹アレルギーで、蟹は食べることができないのでエビマヨ、アンチョビのどちらかになったが、茜がエビマヨ好きなのでエビマヨを譲り、アンチョビになった。

「じゃあ、これ食べたらゲームに戻るけど、崇君はこれから1人で

頑張ってもらう。餞別として回復アイテムとかはあげるけど、後は1人で頑張ってほしい。まあ、Wikiを見ながらやればすぐでできるさ」

「おう、来週から正式だし、今の内にガンガンやつとけよ。初心者で『格闘家』の二重苦だが、『無刀流』と『魔法少女』があるんだ、きつとなんとかなる」

「ちなみに『拳』だと、攻撃力はSTR÷100×拳センスレベル×拳センスレベルだから、理論上は近接最強になれるよ！頑張って！」

茜からは何やら重要な事を言われたようだ。
何かよくわからない計算式を言われた。

「ああ、そうだな、大剣はSTR×9÷100×武器攻撃力に1+大剣センスレベル×0.09をかける感じだから・・・お互いセンスレベル30で・・・崇は『無刀流』で5倍だから×5で・・・」

シンが何かブツブツ言って、紙に計算式を書き始めた。

あのクラス三大馬鹿の1人、谷口心太郎が自分から進んで計算問題に挑む、これは中学の頃の担任が見れば目を疑うような光景だろう。挑んでいるのは小学生レベルの問題だが。

「うお！大剣攻撃力300相当かよ！攻撃力だけ見りゃ最高だな『拳』と『無刀流』の組み合わせ！」

「急に何言ってるんだよ、それに攻撃力だけってなんだ、だって」

「ん？ああ、S o M oには切れ味っー概念もあってな、普通の鉄の剣なら切れ味100あるんだよ。武器センスレベルとか、作った奴がPCならそれ以上の切れ味も有り得るけどな。それと、何度も使えば切れ味は悪くなる」

「それで？」

「こつからが『拳』の痛い所でな、『拳』の切れ味はVIT×0.1なんだ。これは皮の堅さと同じなんだ。つと、堅さの説明もするが、切れ味以上の堅さの敵の攻撃したらはじかれて、切れ味消費量が敵の堅さ・切れ味になって、攻撃力も1/10で計算されるんだ。まあ切れ味消費は『拳』なら関係無いんだけどな。話を戻すが、『無刀流』と組み合わせても『拳』じゃ鉄を砕くのにVIT200は必要になる」

「はあ！？200！？」

200、しかも『無刀流』と組み合わせてだ。

仮に俺がAGIに振らず、VITに振っていればレベル100直前で届く数値だ。

転職試験官さん・・・俺でこれなんだから、あの「大岩を砕く」って言う言葉も、その通り鍛えても大岩しか砕けないって事なんですかね・・・

「ちなみに岩は鉄より堅くて、150が基本的な堅さだ。それにVIT補正が加わるから、『格闘家』の転職試験官が言う通り、普通ならVIT120振りで鍛えた結果、ようやく岩を壊せるレベルだ。・・・あの『スキル』使えば・・・」

岩すら砕けない事に膝を折り頂垂れる。

「谷口先生・・・格闘家に・・・未来は無いんですか・・・」

「まあ待て、あくまでも普通の格闘家の場合だ。『無刀流』なら必要VITは1/5で済む。それに、今後上方修正されるかもしれないからな。それに、たしか『格闘家』には一時的にVITを1.5倍にする『剛拳』というスキルがあったはずだそれを使えるようになるれば、まだ希望はある。・・・大丈夫だ、お前は『無刀流のステ振り間違いの初心者格闘家』だが、同時に『魔法少女』でもあるん

だ。なんとかなるって」

心太郎はニヘラと笑って、俺を励ます。

格闘家は本当にギリギリで岩を砕けるレベルらしい。それと、参考程度に聞けば、鋼鉄は鉄の3倍の300なので、鋼鉄の鎧を着た兵士とかは俺でもまず勝てないらしい。砕くのに最低VIT3000とかインフレすぎる。

一応『スキル』を使えば雀の涙程度のダメージは通るらしいが。故に『格闘家』は地雷なのとか。クローズドでは『無刀流』は2倍だったので、クローズドだったらキャラ削除を勧めるほどだったらしい。

格闘家が如何に地雷かはよくわかった。

攻撃力は高いが、切れ味が絶望的、とのことだ。

ついさつき戦ったゴブリンは皮なので俺でも楽に殴れたが、次に戦うだろう熊は毛と皮で判定していて堅いらしい。さらに毛には5の堅さがあり、狩りにVIT0の熊がいたとしても最低VIT50は必要とされるらしい。

特に俺が注意するのはその次に戦うだろうリザードソルジャーだ。

鱗の堅さは20にVIT補正。最低でもVITは200必要らしい。まあ、現実でも熊を素手で殴り殺すには十分修業しないと無理なんだろうけどさ。

「いくらなんでもこれは酷過ぎないか？『無刀流』が無い『格闘家』はどうするんだ？」

「普通は『格闘家』は選ばない、選んだとしてもすぐに変える。そんな職業だ。まあ、それでも続けるやつはちらほらいるが、まあ極少数だな。例を1つ言えば、『剛拳』が使えるようになるLv20までひたすら下級ゴブリン狩りだな。それから少しずつ敵の堅さを上げていく感じだ」

「ところでん、シーフード貰うよー」

「ああ、茜ちゃんならいつでもウェルカムだよ、一切れ残しといてね」

「ういさー」

俺はアンチヨビピザを食い終わってるが、心太郎は俺に解説するためにまだ半分しか食ってない。

何か悪いことをしたように思う。

「さて、食ったところでS o M oやるか。祟る、お互い頑張ろうぜ。それと、ゲームから公式掲示板にもアクセスできるからさ、後で見とけば簡易W i k iとして使えるさ」

そう言つて、俺の背中をバンバンと叩いた後、心太郎はV R機に入つて行く。

ハム兄さん、茜もそれに続く。3人はクローズド時のギルドメンバーと合流して、ギルドを再結成するらしい。

俺もV R機に入つて、ソーマジを起動する。

今朝のような不安は無く、今は逆にわくわくしている。

そして、俺は再び、S w o r d O f M a g i c O n l i n eの大地を踏みしめる。

今朝以上に現実的に感じる。おそらく、今朝の俺は内心ビクビクしながらだったため、思う存分堪能できなかったようだ。

——始まりの町『アガレス』 中央広場

ここ、中央広場では、色んな人が露店を開いていた。露店というのは、トレード機能を使って商売する事を言う。お金と物を交換する、これに気付いた奴つて意外と凄いやつなんじゃないかと思う。・・・現実でもよく考えればそうだけど、お金は使つてるって感じで、渡してるって感じはしなかったからだ。

まあ、買えないんだけどね。手持ちのゴールドはシンとアカリとハ

ムに貰った1200ゴールド。

鱗の鎧は2000ゴールド。その差は800ゴールド。今の俺には、すぐに800ゴールドためるなんてことはできない。

しばらくはゴブリン狩りだろう。俺のVITなら熊に挑んでもいいかもしれない。

そう思っている内に鱗の鎧は買われていた。

「っと、狩る前にステータス確認しないとな」

格闘家LV1

HP:1600

SP:775

MP:155

STR:110

VIT:75

TGH:75

DEX:15

INT:15

MND:15

LUK:15

AGI:170

無刀流LV-:武器を持てなくなる。STR、VIT、TGH、AGI、SP、SP回復能力が5倍になる。

魔法少女LV-:魔法少女に変身できる。

釣りLV1:釣りができる。

料理LV1:料理ができる。

投擲LV1:物を投げるのが上手くなる。

拳LV2:拳の威力が上がる。

軽装備Lv2：軽装備での防御力・AGIが上がる。

VITは75あるので、なんとか熊は殴れるようだ。AGIも170ある。

ひよつとして『無刀流』って最高級のセンスなんじゃないか・・・？
『拳』センスと『軽装備』センスのLvが上がってるのは、きつとゴブリンと殴り合ったからだと思う。

『拳』センスのような攻撃センスは、攻撃すると上がり、『軽装備』センスのような防御センスは、攻撃を受けると上がる。そして『釣り』『料理』『投擲』^{とつてき}センスは、釣りをする、料理をする、物を投げることでレベルが上がる。この三つは、どれも試してないのでまだLv1だ。

「うーん。明らかにレベル1の能力じゃないよな・・・。まあ、『無刀流』で『拳』に限定されるせいで実際はそれほど強くないんだろうけどさ・・・」

『拳』は弱い。その理由が、センスレベルが低い内は威力が低い。他のセンス、例えば『片手剣』なら、Lv1上がる毎に武器威力が5%上がる。Lv1で威力20の片手剣を持てば、20の105%で威力21になる。

ただ、『拳』は計算が特殊で、センスレベル×センスレベルで威力が決まり、Lv2でも2×2で威力4、片手剣の1/5以下だ。シンが言っていた攻撃力が高い、というのは、この計算だとLv30あれば30×30で威力が900になる、という事だろう。

おまけに、武器があればセンスが無くてもSTRの0.05倍×武器威力となるが、『拳』は無手のセンスなのでこれがかからない。と言っても、STRの0.01倍×拳威力となるのだが。

つまり、『拳』は『無刀流』とセットで初めて他の武器センスと並べる、という事だ。

逆に言えば、『拳』は『無刀流』が無いならまず選ばないので、クローズドβ参加者ならまず『拳』センス持ち〃『無刀流』センス持ちと繋がられるらしい。

・・・つまり、あのパン屋の中では既に、俺〃『無刀流の格闘家』と思われる可能性が非常に高いのだ。

ステ振り間違いの二重苦、初心者で三重苦の。

そして狩場は『トカゲの湿地帯』か、『動物の森』となるが、『トカゲの湿地帯』はおそらくLv1の格闘家じゃPT募集にはかからないだろう。『拳』も効かないし。魔法少女だとしても、今の俺のINTでは『杖』センスを持ったマジシャンには負ける。リザードマン相手に1人じゃ死にやすく効率も悪い。そういった事から、俺は『動物の森』で適当にPT募集して、熊に挑もうと思う。

公式掲示板を開く。公式掲示板とは、ソーマジの公式ホームページ及びゲーム内から閲覧、書き込みができるネット掲示板の事である。ソーマジに登録しないと書き込みはできないが、ゲーム内からも利用できる、というのでWikiよりも利用者は多い。

俺は『動物の森PT募集板Part2』、というスレッドに書き込んだ。

191 名前：TATARI

【職業】 格闘家

【性別】 男

【ステータス】 HP：1600 / SP：755 / MP：755

STR：110 / VIT：75 / TGH：75 / D

EX：75

INT：75 / MND：75 / LUK：75 / AG

I：170

【センス】無刀流、魔法少女、釣りLV1、料理LV1、投擲LV1、拳LV2、軽装備LV2

【希望】優しく教えてくれる方

【コメント】初心者で格闘家ですが、無刀流と魔法少女でHP以外の全ステータス5倍になってます。

——『動物の森』 東の森

『動物の森』とは、『アガレス』から西へ30分歩いた所にあるダンジョンだ。ただまあ、俺はAGIが高いから20分ほどで来れたが。

今は14時30分。辺りは昼食後なので人で溢れている。おそらく、近くにいるモンスターは狩り尽されているだろう。

『動物の森』は入口付近なら野兎や大ネズミといった、弱い動物モンスターが出るが、奥に行けば虎や熊等の強い動物モンスターもいるので、序盤の狩場にぴったりのダンジョンだ。そしてその奥の奥には『魔獣の森』と呼ばれるダンジョンに繋がる道がある。

『魔獣の森』では、グリフォンやレッドウルフ等の高レベルモンスターが出る。その強さは虎や熊より数段強く、うっかり迷ってしまったら、すぐに復活ポイント送りとなる。とWikiに書いてあった。

俺は公式掲示板を開き、さっき貼った募集に誰か応募してくれてるかどうか確認する。

191 名前：TATARI

【職業】 格闘家Lv1

【性別】 男

【ステータス】 HP：1600 / SP：755 / MP：755

STR：110 / VIT：75 / TGH：75 / D

EX:75

INT:75/MND:75/ LUK:75/AG

I:170

【センス】無刀流、魔法少女、釣りLv1、料理Lv1、投擲Lv1、拳Lv2、軽装備Lv2

【希望】優しく教えてくれる方

【コメント】初心者で格闘家ですが、無刀流と魔法少女でHP以外の全ステータス5倍になってます。

192 名前:不死アナさん

<<191

<【性別】男

<【センス】魔法少女

これってどうなの？

もしおにゃのこだったら強いし大歓迎です。

193 名前:OIL

<<192

cβではステータスが変わるだけで変化無し。魔法男子でした。

それとステータスを/5するとステ振り間違えてる地雷と分かる。

それに初期杖+杖Lv1+INT58振り>INT75なんでそっち探した方がいい

194 名前:不死アナさん

<<193

ありがとん

初心者ガチムチ魔法闘士♂に優しく教えてくれる人っているの？

195 名前：Hack You
お断りします

196 名前：GIGANT
俺がいるぞ
<<191

平原で変身シーン見せてもらったし、16時までに動物の森奥地に
来れたらPT入れますよ

197 名前：不死アナさん
初心者格闘家に奥地勧めるとかGIGANTさんマジパネエっす

しかも覗きツスかwwwwww

198 名前：GIGANT
覗きじゃねえよ、ちゃんと本人に承諾取ったわwwwwww

199 名前：AKAMA
<<198
なにそれこわい

【職業】マジシャンLV1

【性別】男

【ステータス】HP：1550 / SP：155 / MP：164

STR：11 / VIT：11 / TGH：11 / DE

X：11

INT：63 / MND：11 / LUK：11 / AG

I：11

【センス】杖LV3、軽装備LV1、マナLV2

【希望】前衛2人募集

【コメント】友達の僧侶といるので回復できます！

200 名前：不死アナさん

<<199

戦士Lv3、槍Lv3、重装備Lv5、スタミナLv2行きます

クローズドβでは、魔法少女は変身シーンも変化も無かったのか。それと名前に日本語対応してたんだな。知り合いが全員半角英字だったから気付かなかった。

今の時刻は14時40分。後1時間と20分までに奥地に到着しないと、せつかくの機会が無くなってしまう。

それにこの様子だと、これを逃したらもう無いだろう。完全に地雷認定されている。

「それにしても、ガチムチ魔法闘士。ってどういう事だよ……。これが渾名になったら洒落にもならない、絶対に阻止しないと。しかし、今から奥地に向かわないと間に合わなくなってしまいそうだし……。くっ、究極の選択だな」

そう考えている内にも時間は進んでいる。迷ってる暇は無い。訂正は後ですとして、今は急いで奥地までたどり着かなきゃならない。幸いにも辺りに人はいない。魔法少女に変身して、急いで森を駆け抜ければきつと1時間で着けるだろう。

『魔法少女変身』で変身を開始する。

前回と同じように、俺の体は青い光に包まれ縮んでいく。

やっぱりこれは恥ずかしい。何度やっても慣れる事は無いだろう。

というか慣れてしまったら色んな意味で終わりだと思う。

光がおさまり、光の中から魔法少女になった俺が現れる。

そつえば色々青いけど、水属性が得意だったりするのだろうか。

後で『スキル』を確認しておこう。今は、急いで動物の森の奥地に向かわなければならぬ。

俺は森に向かって駆け出した。

森に駆け込んでから10分ぐらいだろうか、奥に進むほど人が少なくなっていく事に気付く。

やっぱり低レベルのプレイヤーは野兎や大ネズミを狩っている。大ネズミが大型犬みたいな大きさにビビる。

野兎を殴るのは少し抵抗があるが、あのくらいなら殴れそうだな。そんな事を思っていると、目の前に大ネズミが3匹現れた。周りを見ているが人はいない。これならくぐり抜けても問題はなさそうだな。周りに人がいる時にこんな事をしたら、この3匹は俺を見失うと、近くにいる他のプレイヤーに襲いかかる。これを利用してPKする人もいるらしいし、そんな疑いをかけられても困る。

「よつと」

大ネズミの脇を通り過ぎて、どんどん奥へ進む。後ろをチラリと振り返ると、大ネズミが追いかけてきていた。しかし、どんどん距離は開いていく。この調子ならすぐに俺を見失うだろう。

そう思っていたら前から別の大ネズミ3匹が現れた。

このままだと、挟み撃ちの形になる。そうなってしまうと16時までに奥地にたどり着くのは困難になるだろう。

俺は立ち止まらず、前にいる大ネズミの脇を通り、奥に進む。

振り返ると大ネズミ6匹が俺をおいかけてきていた。

だが俺は前に進むしか無い。16時までというのは急いで着くか着かないか、という時間である。

ひよつとしたらギガントも冗談であんな事を書き込んだのかもしれない。

もしそうだったとしたらギガントを殴って『拳』を鍛える事になるだろう。

そんな事を思いながら、俺は森を駆け抜ける。

——『動物の森』 奥地

奥地にたどり着く。だが俺は走り続ける。まだ追いかけていないからだ。大ネズミの索敵範囲がこんなに広いとは思わなかった。俺を追いかけていた大ネズミはいつのまにか30匹ほどに増えていた。

「ギガントさーん！どこですかー！？」

俺は声を張り上げ、ギガントを呼ぶ。この声に反応したのか近くの茂みがガサツと揺れた。

期待してその茂みの方に駆け出す。しかし、そこから出てきたのはGIGANTという名の巨漢ではなく、大ネズミよりもさらに一回り大きい虎だった。

今の状況は、前方に虎、後方に大ネズミ×30。絶体絶命の危機だ。

「ちょ、誰か助けてー！」

助けを求めて叫ぶ。多分、悲鳴になっていたと思う。

虎の牙が顔に近くなる。いくらVRゲームと言えど、現実的すぎて虎のキバがスローになる。

人って危機的状況になると周りがスローモーションに見えるって、本当だったんだな。

あまりの怖さに目をギュツとつむる。そして虎の牙が俺の頭に――

ガツンッ

と、衝撃音がした。俺の頭に、ではない。

恐る恐る目を開けると、ギガントが大鎚を振り上げて立っていた。

「おう、タタリ、大丈夫か？」

あれからエレアとリンゴとウィンディが来て大ネズミを蹴散らして、ギガントが虎を倒した。

俺はその間腰を抜かしていて、何もできなかった。

「まさか本当に来るとは思わなかったな。大ネズミも大量に連れてきやがつて……。まあいい、15時55分。約束通りPTに入れてやるよ」

「あ、ありがとうございます……」

ギガントの手を取り起き上がる。

そしてギガントのPTに入れてもらう。これでようやく第一歩だ。小さく拳を握ると、大ネズミを倒し終えたエレア達が話しかけてきた。

「いやー、それにしてもタタリちゃん勇氣あるなー。Lv1で森の奥地まで来るって聞いたこと無いわ」

「タタリちゃんすごいのだー！ いやー、『無刀流』だからって内心ナメてました！ ごめんなさい！」

「……お転婆」

何やらウィンディは俺を女の子扱いしている。俺男ですよ。今は魔法少女 فقط。

俺をPTに入れたギガントは、早速俺に指示を出す。

「よし、じゃあタタリには早速大型獣狩りに参加してもらう。ターゲットは1体で出る熊と虎だ。狼は集団で来るから俺達に任せろ」
「はい！」

そして俺の虎及び熊狩りが始まった。

あれから辺りを歩いて探索していくと、茂みから狼5匹と熊1匹が現れた。

ギガントとウィンディは狼の集団に突撃して、武器を振り回す。
その間にエレアは『ファイアブレット』と唱え、リンゴは『ヒール』と唱えていた。

『ファイアブレット』は火属性の下級魔法で、俺の『クリアブレット』に火属性が付いたようなものだ。

『ヒール』は下級回復魔法で、指定した相手・・・、この場合だと攻撃を受け止めているギガントのHPを回復させる。

ギガント達は狼を相手にしているため、熊が1匹その場に取り残される。

そしてギガントが俺に声をかけてきた。どうやら出番がきたようだ。

「タタリ！そちに熊が流れた！殴り殺せ！」

「合点承知！」

俺は『格闘家』のジョブスキルの『強打』を使って殴りかかる。

『強打』は格闘家にとって基本のスキルだ。SPを消費して強力な打撃をたたき込む。

熊のHPを見る。HPは1/10ほど減っていた。後9回『強打』

をたたき込めば倒せる。

これなら勝てる気がする。続けて2回、『強打』をたたき込む。反撃だろうか、熊が腕を振り下ろそうとしていた。しかし、その動作は俺のAGIが高いから遅く見える。ゴブリンの時にしたバックステップは失敗すると恥ずかしい事になるので、脇をすり抜けるようにしてかわす。

「オラア！」

熊の背中に気合いを込めて『強打』をたたき込む。普通の女の子ならこんな声上げないと思うが、俺は男だ。問題無いと思う。『強打』を背中から受けた熊のHPは一気に2/10くらい減っていた。多分クリティカルヒットしたんだと思う。

熊のHPは残り半分。ギガントの方を見てみれば、狼は2匹に減っており、エレアとリングも混ざって狼を叩いていた。リングが「フルボッコ！」と叫んでいる。

早く倒さないとゴブリンの時のシン達みたいに俺を観戦しながら待つかもしれない。

さっさと決めるために、振り向いた熊の脇をまたすり抜けて、背中に『強打』をたたき込む。

それを5回繰り返すと、熊はドシンツと倒れ込む。ギガント達も狼を倒し終わったようで、額を拭うように息をついていた。

ステータスを見ると、『格闘家』と『拳』のレベルが上がっていた。

格闘家LV3

HP:1800

S P : 1 6 0
M P : 1 6 0
S T R : 1 2 0
V I T : 8 5
T G H : 8 5
D E X : 8 5
I N T : 8 5
M N D : 8 5
L U K : 8 5
A G I : 2 0 7

無刀流 L v - : 武器を持たなくなる。 S T R、 V I T、 T G H、
A G I、 S P、 S P 回復能力が 5 倍になる。

魔法少女 L v - : 魔法少女に変身できる。

釣り L v 1 : 釣りができる。

料理 L v 1 : 料理ができる。

投擲 L v 1 : 物を投げるのが上手くなる。

拳 L v 4 : 拳の威力が上がる。

軽装備 L v 2 : 軽装備での防御力・ A G I が上がる。

2時間くらいだろうか、襲い来る熊や狼を退けながら少しずつ、森を進んでいく。

このまま『魔獣の森』まで進んで、死に戻りする予定だ。ただ、幻獣は倒せるなら倒して大幅レベルアップを狙うらしい。

最初の熊との戦闘から狩りは順調で、1時間が経った頃には俺も狼狩りに参加させられるようになった。

狼は熊よりも素早い、攻撃力はその分低い。攻撃は極力回避しているが、それでも数が多く、避けきれない攻撃というものが出てくるが、その攻撃力の低さが幸いして、回復POTもまだ余裕がある。

「おい、タタリ、回復POT余ってないか？」

「あ、余ってます。ちょっと待ってください、今渡しますんで」

ギガント相手にトレード画面を開く。ダンジョンのど真ん中でトレードするのは自殺行為だが、エレアとリングとウィンディが警戒しているため、その危険は無い。

アイテム画面からトレード画面に小さい回復POTを5個移動して、決定ボタンを押す。これで、後はギガントも決定ボタンを押せばトレード完了だ。

「回復POT5個か。じゃあ1個150ゴールドで買い取るわ。750ゴールドと」

「い、いいですよお金なんて。PTに入れてもらってるんですからこれくらい。それに、これって100ゴールドで買えるやつですよ」

「何言ってやがる。回復POTはダンジョンの奥地じゃ生命線とも言えるんだぞ。これでも安いくらいだ。払わせろ。」

ギガントの押しが強く、断りきれずに決定ボタンを押される。普通のプレイヤーならダンジョンの難度にもよるが2倍3倍は当たり前らしい。クローズドβ時はそういった商売をするプレイヤーもいたらしい。もっとも、大量のアイテムを持つにはかなりのSTRが必要だし、持ちすぎると移動速度が遅くなるので、その商売ができるのは高レベルの戦士職だけだったらしいが。

——『動物の森』 魔獣の森へ至る道

日が沈み始めたころ、俺が参加しているギガントのPTはようやく『動物の森』の出口にたどり着く。

ここから先は文字通り次元が違う。本来なら、『トカゲの湿地帯』の奥地でレベルを上げてから挑むような所だからだ。

出てくるモンスターの強さは1体が高レベルの高級戦士並。それが集団で襲いかかってくるのだ。下級職で構成された俺含めたギガントPTの全滅は必至だろう。

このまま一気に進んでもいいのだが、レベルの確認や収集品の整理等をするためにここで小休止することになった。

「ウインディー、職業レベルどれくらいになったー？」

「22。リングゴは？」

「うへー、私は20。もっと前出るべきだったかなー」

「いやいや、ワイなんて18やで？リングゴでも十分前出てる方や。ギガントはどんなんや？こん中じゃ一番敵倒してるやろ？」

「俺は25だな。タタリ、お前はどうか？」

「あ、俺は19です」

「うっひゃー、タタリちゃんワイより上か……。ま、前衛職やか

「仕方ないのかな」

『拳』もLv13に上がっている。狼の攻撃を何度か受けたからか『軽装備』もLv7になっていた。それはさておきタタリ”ちゃん”って。俺一応男ですよ、エレアさん。

苦笑いしているとウィンディが俺の頭を撫でてきた。この人は本当に俺の頭を撫でるのが好きなようだ。そして口を開くと、

「タタリは今は魔法少女だ。だから言葉使いも女の子らしくした方がいい」

「いや、でも、俺元は男ですよ」

「女の子らしくした方がいい」

こんな感じで俺に女の子らしく振舞うようにさせてくる。それに従ってもいいのだが、男時にすっかりやってしまったら俺の通里名が「オカマ格闘家」になりそうで、抵抗がある。うっかりをやらかさなければいい問題なのだが。

「タタリちゃん。別に俺っ娘でもワイは一向に構わんでっ！でもできれば「ボク」って言うてほしい！」

「はいはい！私は「あたし」が似合うと思います！」

エレアはボクっ娘スキのようだ。リンゴは・・・、なんだろう？何かのキャラクターの一人称だろうか。

それで「あたし」とか言ったらまたキヤーキヤー言い出すと思うのと言わないが。

ギガントの方を見ると、何かの画面を見ながら笑っていた。俺の視線に気付くと、画面を閉じて俺に話しかけてきた。

「ああ、俺は別になんでも構わんど。それよりタタリ、掲示板見て
みる、面白い事になってるぞ」

ハハハ、とギガントは笑う。なんだろう。何か淒く嫌な予感がする。

357 名前：不死アナさん
ガチムチ 魔法闘士 タタリ

358 名前：Hack You
やめろwww

359 名前：OIL
TATARIは森の奥地にたどり着いたのだろうか

360 名前：不死アナさん
熊さんに掘られてるんじゃねwww

361 名前：IDATEN
<<191

「無刀流と魔法少女でHP以外の全ステータス5倍になってます（
キリッ」

だっっておwww

362 名前：貴腐人
今日のホモスレはここですか？

363 名前：電柱
そうでござる

364 名前：試練の地H道
腐女子は隔離スレ池

365 名前：ギアナ低地
格闘家ってまだ廃止されてなかったんだな・・・

366 名前：HackYou
逆に強化されてるらしい
強化されても弱いけど

367 名前：不死アナさん
格闘家強化って誰が得するんだよ

368 名前：IDATEN
TATARIが得するんだろwww

368 名前：電柱
格闘家強化する暇があったら侍強化するべきでござる

369 名前：虚無僧等

【職業】クレリックLv7

【性別】男

【ステータス】HP：1850/SP：185/MP：242

STR：17/VIT：17/TGH：34/DE

X：17

INT：34/MND：34/LUK：17/AG

I：9

【センス】杖Lv5、重装備Lv4、マナLv5

【希望】前衛3人募集

【コメント】熊に殴られて回復させてくれるマゾ募集

368 名前：不死アナさん

タタリー！出番だー！

ネットは残酷だった。

知らない内にガチムチ 魔法闘士 タタリという渾名が俺に与えられていた。

さらにホモでマゾ扱いだ。

俺は崩れ落ちたように倒れる。

「・・・遅かった・・・」

「うわっ！ひどっ！」

「ガチムチ 魔法闘士 タタリかー、実際はマジロリ 魔法少女
タタリなのになー」

「エレア、そこじゃない」

リンゴ達もあのスレッドを見たようで、リンゴは「酷い！」を連呼し、エレアはそのままニヤニヤしながらスレッドを見続け、ウィンディは倒れた俺を抱きかかえ、頭を優しく撫でる。時折「大丈夫だ」と言ってくれるウィンディの優しさが嬉しいが足りない。
そこにギガントが申し訳なさそうな顔でやってきた。

「あー、なんだ、すまん。笑って悪かった」

「おい、ギガント、これギガントとワイとタタリちゃん並べば、ガチムチ&魔法闘士&タタリでいけるんじゃない？」

「エレア、そのヘラヘラした笑いを止める。殺すぞ」

「ひー、冗談、冗談やってウィンディ。そのナイフ下ろしてくれ。
・
・ごめんな、タタリちゃん」

エレアはヘラヘラした笑いを上げていたが、ウィンディがナイフを眼前に持つてくると、その笑いを止め、画面を閉じて俺に謝る。
そして、みんな黙って、だんだん雰囲気が悪くなっていった。

どうしよう。俺のせいで雰囲気が悪くなってしまったようで、俺が落ち込んでいると、やがてウィンディも俺を撫でるのを止め、手を膝の上に置いて握りこぶしを作っていた。

そこに、何か思いついたようにリンゴがニヤニヤしながら近づいてきた。

「タタリちゃん、タタリちゃん。タタりんってのはどうかな!？」

「あの・・・、リンゴさんは何を言ってるんでしょうか・・・」

リンゴはニッコリと笑い、頭をかくような動きをした。

「いやー、やっぱりあんな酷いのじゃなく、タタリちゃんにはもっと可愛い渾名が似合うと思うんですよ!どうかな!?タタりん!」

どうやら黙っていたのは渾名を考えていたかららしい。タタりんってなんだオイ。

それについてウィンディが顎に軽く手を当て、口を開く。

「・・・タタりん」

「いや、ウィンディも真似しないでいいですから!」

その話に加わるようにエレアも賛同する。

「いいんじゃないか、それ」

「ちよ、エレアまで何言ってたんだよ!」

さっきとは違う方向で雰囲気がおかしくなる。その違いと言つのは、

みんなに笑顔が戻り始める、というものだった。
ギガントもハハハ、と笑い、俺の肩をトントンツと叩き、俺に話しかける。

「まあいいじゃねえか、タタリ、みんなお前のために渾名考えてく
れてるんだからよ」

確かに、みんな、笑顔で渾名を考えている。「タタリン」の他には、
「マジカル タタリ」だの、「姫さん」だの。

だんだんおかしくなっていく、「マジカル プリンセス タタリ」
とか、「タタリ姫」だのになってくる。

「って、良くないですよ！俺男ですよ！なんで女の子に付けるよう
な渾名なんですか！？」

ギガントが「え？何言ってるんのお前」みたいな顔をする。
少し顎に手を当て考える素振りをした後、俺を指さして、

「じゃあ、お前、どんな渾名が良いんだよ」

と、聞いてきた。

む、渾名っていきなり言われてもどんなのが良いかって思いつかな
いもんだな。

「えっと・・・コールドワルツ昏睡周波数、とか・・・」

「それは渾名じゃねえ、二つ名だ」

ぐっ、確かに二つ名だった。それに二つ名と渾名は別にしておきた
い。

『蒼空の魔法騎士タタリ』とか言われてみたいし。

「えっと・・・じゃあ、”リ”を”ル”に変えて「タタル」、とか」
「はあ、お前は今魔法少女なんだぞ、むしろ女の子らしい方がいい
だろ？ウィンディの奴も前から言ってるしょ」
「タタリン」がいい」

向こうでは「タタリン」に決まったようで、代表してウィンディが
俺に決断を迫ってくる。と言っても、断っても食い下がってくるの
で「YES」以外の選択肢は無いのだが。

「・・・はあ。もうそれでいいよ」

「じゃあこれからよろしくねー！タタリン！」

「頼むぜ！タタリン！」

「よろしくね、タタリン」

「あー、まあ、諦めろ、タタ・・・りん」

ギガント
最後の砦まで落ちてしまった。まあ、ガチムチ（略）よりはマシ
なのだろうが。

——『魔獣の森』 入口

小休止を済ませ、俺の渾名が「タタリン」に決まった所で俺達は『
魔獣の森』に入った。

辺りは日暮れという事を考えてもそれ以上に薄暗く、まるで森が死
んでいるような所だった。

入口の方はまだ安全らしく、敵の集団も襲ってきそうにない。しか
し、1発当たれば即、復活ポイント送りになるくらいの高レベルモ
ンスターが辺りをうろついているので、PTメンバーに緊張が走る

事に変わりはない。

「とりあえず、1体引き付けて、ボコるぞ。1発殴れば御の字だ。どうせ俺たちの武器じゃはじかれる。威力よりも命中を重視しろ。・タタリ、これをあそこのグリフォンに投げろ」

この中で『投擲』センスを持つてるのは俺だけだ。・・・まあ『投擲』はセンスレベル1だとあってもなくても同じだが、俺は『無刀流』でSTRが高く、『投擲』も鍛えられる、という理由で俺が投げる事になった。

ギガントから貰ったのは重さ0.1kgの小石。小石と言っても、拳より少し小さいくらいだ。

『投擲』Lv1での射程はSTR/重さ/10×1メートル、威力はSTR×重さ/100×1、切れ味はSTR×重さ/200×1、命中率はセンスレベル×1になる。Lv2になれば、倍投げれるようになり、Lv100になれば、100倍の射程、威力、切れ味、命中率をたたき出せる。・・・俺はまだLv1だけだ。

「おい、タタリ、早く投げろ。こっちはもう準備万端だ」

ギガントから急かされる。

俺はグリフォンに狙いを定め、力の限り投げつける。

俺のSTRは今や190。小石の射程は190mだが、威力は0、切れ味も0で絶対に弾かれるしダメージも通らない。

「クエエ!？」

「よし!こっちに來たら全力で当てに行け!」

ちなみに『投擲』も地雷スキルの一種だ。理由は、「使い辛い」。威力を上げるには重さを上げるかSTRを上げるか『投擲』を鍛えるしかない。

重さを上げると威力と切れ味は上がるが、射程は短くなるし、STRが高くないと過重でAGIが下がる。STRを上げるにはステータSPを振るか、戦士職に転職するか、しかない。『投擲』を鍛えるのは、最初の理由で厳しい、という訳だ。

俺は『無刀流』でSTRが5倍になっているから、ある程度の量は持てるし、威力と切れ味も高くなるし、この2つの理由で『投擲』を鍛えやすくなっているの、主戦力として使っていける。

『拳』で近距離を、『魔法少女』で中距離を、『投擲』で遠距離を戦えるという訳だ。鍛えれば、の話だが。

「クエエエエエ！」

「うお！『麻痺ブレス』を吐いてきやがったぞ！気を付けろ！」

そう言ったギガントはバックステップで距離をグリフォンとの距離を離す。

『バックステップ』のセンスボックスを買ったのか、たまたま成功したのかは分からない。

「チイツ！『疾風弾』！」

ウィンディは『狩人』の職業スキルだろうか、短剣をしまつて弓を出してグリフォンに矢を撃っていた。

おそらく『弓』センスは既に買っているだろう。でなければわざわざ弓を出したりはしないはずだ……多分。

「『ファイアブレット』！」

「『シャインブレット』！」

エレアは『ファイアブレット』を、リンゴは『シャインブレット』をグリフォンに向けて放つ。

赤い光と黄色い光がグリフォンに当たるが、ダメージは無いようだ。ひるまずにこちらに向かってくる。

ウィンディも結構な数の矢を放っているが、いまだグリフォンのHPは減っていないように見える。

ダメージが届いていないのか、はたまたHPが高くて減っているように見えないのかは分からない。

ただ、弾かれているし、きっと前者なんだろう。

「『ハンマーインパクト』！」

ギガントはグリフォンの背後に渾身の一撃を振り下ろす。そしてついに、グリフォンのHPがほんの僅かに減った。届いたのか！？しかし、直後にギガントは弾かれて体のバランスを崩した所にグリフォンの爪を受けて一気にHPを削られて光になる。ソーマジでは最大HPの倍以上の攻撃を受けた時オーバーキルになり、『蘇生』する間も無く復活ポイントに送られる。

その後、ウィンディも『麻痺ブレス』で倒れ、エレアとリンゴと俺はグリフォンに突撃して、スキルを使う間も無くオーバーキルで復活ポイントに送られる。

——始まりの都『アガレス』 復活の神殿

気付いたら復活ポイントに寝転がっていた。隣にはリンゴやエレアも苦笑いを浮かべて立っていた。

「あー、まさかオーバーキルされるほど強いとはな・・・」

「ワイらはまだ下位職やし、仕方無いっちゃ仕方無いさ。相手は1体とはいえ高レベルの上級職クラスやで」

「そーだよタタりん！また強くなったら挑もう！」

復活ポイントというのは、『アガレス』の中央にある復活の神殿のことで、プレイヤーは死ぬとそこに飛ばされる。ソーマジの舞台となる大陸には、中央にある始まりの都『アガレス』以外には小さな町や村が点在しているだけで、今の所『アガレス』以上に大きな都市は無い。

『アガレス』から冒険に出かけ、『アガレス』に冒険から帰ってくる、というわけだ。・・・帰り方は、冒険先で死ぬのがプレイヤーの一般的な帰り方だが、経験値が惜しい時には『転移札』というアイテムや、『転移門』というスキルでも帰る事ができる。転移する場合は、『アガレス』でなくともいいのだが。

復活ポイントから出ると、ギガントとウィンディが待っていた。

「お、お前らか。どうだ、手応えはあったか？」

「いや、ワイもリンゴもそんな手応え感じられませんでした」

「そうか・・・。俺とウィンディにはな、あったんだよ、手応え。防御無視のラッキークリティカルってやつだな」

ウィンディはギガントの言葉に首を縦に振って肯定する。
それにエレアが「やっぱりか・・・」とつぶやく。リングは「凄い
凄い」とギガントを褒めている。
ダメージが通ったってことは、少なからずセンスに経験値が入った
んだと思う。

このゲームではモンスターを倒す以外にも経験値が入るものがある。
学校に行って勉強すれば『魔法』や『解読』のセンスに経験値が入
るし、素振りをしただけでも僅かだが素振りした武器センスに経験
値が入る。

俺も釣り教室や料理教室に通えば『釣り』や『料理』に経験値が入
るだろう。もちろん、ゲーム内での話だが。

『軽装備』や『重装備』は敵の攻撃を受ければ経験値が入るが、最
大HP以上の攻撃を受けても防御センスに経験値は入らない。その
ため、今回グリフォンに受けた攻撃で大幅レベルアップ！なんてこ
とはない。

しかし、ギガントの『大鎚』やウィンディの『弓』には、僅かなが
らグリフォンのHPを削ったとして、経験値が入っている。グリフ
オンは強いから、一気にレベルアップしているかもしれない。

それと、

「タタりん、お疲れ。俺達は今日はもう終わるからよ、また明日奥
地狩りしような」

俺は戦闘時や重要な話の時以外は、タタりん渾名で呼ばれるようになった。
できればやめてほしいのだが、あの不名誉な渾名よりもマシで、な
ガチムチおかつ先に流行らせれば

あの不名誉な渾名も自然消滅する、との事なので仕方なく同意して

いる。

ギガント達とは中央広場まで一緒に行ったところで、俺はゲーム内の食事のためパン屋に向かおうと、ギガント達はログアウトするため、画面を出してログアウトしようとしていた。

ギガント達に背を向け、パン屋に向かって歩き始めようとした時、背後から不吉な言葉が聞こえてきた。

「・・・ん？ログアウトできねえな・・・」

「ログアウトできない」、その言葉に、不安が蘇る。『デスゲーム』が始まったんじゃないか、と。

それを否定しようと俺もメニュー画面を開いてログアウトしようとするが、メニュー画面が開いたと同時に、頭にキィィィ、と音が響いてきた。脳に直接撃打ちこまれたような気がして、地面にうつくまり頭を押さえる。

メニュー画面の端の時計を見る。時刻は午後6時30分。

頭にはいまだ音が響いていた。

響いている音は不快で、俺の心は『デスゲーム』が始まったんじゃないかという不安でいっぱいだ。

音が鳴りやむと、続いて声が響いてきた。

『——この世界が魔王に乗っ取られました』

魔王——RPGに出てくるラスボスとか、その一つ前のボスだ。

ソーマジのイベントだろうか。しかしそんな話は聞いていないし、掲示板でも見なかった。

突発的なイベントだろうか。わざわざログアウトまで制限して結構な事だ。

この時の俺はまだ、心太郎の『デスゲームなんて都市伝説だ』という言葉を信じていた。いや、信じることで絶望から目を背けていたんだと思う。

言葉は続く。

『私たちに抗う術はありません』

『抗う事ができるのは、あなたたち冒険者しかいないのです』

『魔王を倒して、世界に平和をもたらしてください。』

『魔王を倒さない限り、現実には戻れません』

『お願いします、どうか世界を救ってください』

『どうか・・・どうか・・・』

女性だったのだろうか、声は無機質でも、口調は女らしかった。

しかし、今の俺にとってはそれほど重要な事じゃなかった。

今朝、不安だった事、昼になって、不安じゃなくなった事。それが、現実になった。

『現実には戻れません』。その言葉を聞いて、心太郎の言葉が粉々に粉碎されたような感じがして、俺はがくりと膝を折った。

「マジかよ・・・」

本当に、信じられない。

メニュー画面からログアウトを選択するが、ログアウトできない。

『世界を救わないと』『魔王を倒さない』『現実に戻れない』。殺し合いよりはマシだろう、マシだろうが、きつと、誰かが死ぬ。誰かが死ぬ。それがこわい。たまらず、自分の体を抱きしめる。

「魔王って何だ？世界ってなんなんだ？おい、答えてくれよ、助けてくれよ・・・」

つぶやきは消える。誰も返事をしない。皆驚いているんだろう、辺りは騒然としていた。・・・きつと、俺のつぶやきなんか、みんなに聞こえなかったんだろう。俺は悲しくなつて、泣いた。

泣いてる場合じゃない。そう思つて、立ち上がろうと思つたが、顔を上げれば、人が大勢見えた。その表情は皆、重く、暗い。

俺と同じように膝をついて、嘆いている人。突然の事に、泣き出し
ている人。

隣の人を抱きしめて、励ます人。恐怖のあまり、町から出ようと
する人。

現実に戻ろうと、しきりに「ログアウト!」と叫んでいる人。茫然
と、自分におきた事を呟いている人。

・・・本当に色んな人がいた。

「はあ!?!『魔王を倒さない限り現実に戻れない』って・・・『デ
スゲーム』か!?!アレって都市伝説じゃなかったのか!?!」

「ちょ、待てよ、明日は合コン・・・。俺の甘い青春が始まる予定
だったのにー!」

「ど、どうしよう、そろそろ家族に晩御飯を作ってあげないといけないのに……」

「お、俺は、こ、こんな所なんかにいられるか！俺は現実に戻る！戻るぞ！」

「俺、実家に帰る途中で、ホテル代わりにVRカフェによったんだ……。帰ったらさ、お袋に、ただいま、ってさ、言うつもりで……」

「純、競争しようぜ、俺がみんなを現実に戻す。お前は後からついてこい、先に行つて、お前のこと待ってるからな……」

「おかーさん！おとーさん！うわーん！」

「そ、そんな、馬鹿な、こ、こんな事あるはず無い、ゲームが自我を持ったのか？……いや、そんなこと、あるはずが……」

「だ、大丈夫だ、キミは僕が絶対に死なせない。生きて、現実に戻るんだ……」

「このままゲームに取り残されて死ぬなんて、そんな縁起でも無い事言つなよ！そんなことならないってば！」

「ひつ！？今私に触つたの誰！？……なんだ、猫か……」

「俺さ……、今まで天涯孤独の身だったんだけどさ、昨日、大事な人ができたんだ、義理の妹でさ……」

「だ、大丈夫だ、妙な事さえ起こらなければ、このまま現実に戻る。大丈夫だ、妙な事なんて、そう、滅多に起こらないものなんだからさ……」

「嘘……明日、お兄ちゃんが5年ぶりに帰ってくるのに……」

「俺が……魔王を倒してやる……!」

広場は色々な人の声で埋め尽くされている。そして、改めて気付いた。気付かされてしまった。

7月20日、この日、俺は、俺たちは、Sword Of Magic Onlineの世界に、取り残されたのだ。

そのことに気付くと、俺の心は折れてしまったようで、その場にドサリと倒れ込んだ。

12（後書き）

デスゲームっぽくなりつつ、第一章を終わります。

「——い、おい！タタリ！俺だ！ギガントだ！」

「うえ・・・ギガ、ント・・・？」

目を覚ますと、目の前にギガントの顔があった。

いつもなら、即座に払いのけるのだが、今の俺にはギガントの温もりが暖かった。

そのままギガントの胸に顔を埋めてしまう。

「あー、なんだ。タタリ、歩けるか、ここは危ないから、宿屋に行くぞ。・・・ウィンディ、そんな怖い顔でこっちを見るな。善意でやってるんだ、善意で」

「・・・そう」

振り返ると、ウィンディはそれを少し離れた所から苦虫を噛んだような顔をして見ていた。

そこにリンゴとエレアが近づいてくる。リンゴは少し涙目で、リンゴもこの状況に混乱しているようだ。

「ど、どどどどうしよう！みんなパニックになっちゃってるよ！みんなおちうちちてー！」

「まずはリンゴが落ち着けや」

バシン、とエレアがリンゴの頭を叩く。

それにより更にリンゴが混乱する。

「うー、い、痛いー。って、てててて、痛い！？つ、痛覚まであるよー！どうしようー！どうしようぶどうしようー！」

「あー、うつさいなー。ちっと黙ってる。すまんギガント、ワイら先にC級宿^{ランク}に行ってるわ」

エレアはリンゴの口を手で塞ぎ、小脇に抱え込み、走り去っていく。見る人によれば、その光景はまるで誘拐しているように見えただろう。

「タタリ、俺達も宿屋に向かうぞ。繰り返すが、ここは危ない」

「このままここに倒れていれば怪我をする。早く行くぞ」

ウィンディに手を捕まれ、そのまま引つ張られるようにして広場から離れる。

後ろを振り返ると、あるところでは殴り合いが始まったりしていた。このまま、混乱は広場全体に広がっていくだろう。しかし、俺にはどうする事もできなかった。

――始まりの都『アガレス』 C級宿屋

『アガレス』には宿屋がS級、A級、B級、C級、D級、E級、F級、G級の8つあり、C級宿屋は4番目に良い宿屋だ。

値段は良い宿屋ほど高くなるが、その分設備も充実してくる。G級の宿屋は馬小屋同然だが、F級では寝袋、D級では布団、C級ではベッド、と寝具もだんだん良くなっていき、B級からは調合台や台所等も付き始める。

この寝具というのが重要で、寝具を使うと、動けなくなる代わりにHP、SP、MPの自然回復量が大幅に上がる。

この自然回復量はゲームにログインしてなくとも自動的に適用され

るので、基本的にプレイヤーは夜寝る時になったら宿屋に入ってログアウトし、朝になったら狩りに出かける。まあ、学生は朝と昼は学校に行かなくてはいけないので夕方からだが。

中には寝ずに回復POTを使って戦い続けるプレイヤーもいるが、夜になるとモンスターの能力が上がるし、『暗視』等のセンスが無いと命中、回避が下がって危険度が増すので、そういったプレイヤーは一部に限られる。

他にも、町の外で寝たらモンスターに襲われて気付いたら復活ポイントに居ました、って事もあるし、宿屋に泊らずに一晩過ごしたらしいしてHP、SP、MPが回復せずに朝になっていた、という事もある。

寝るだけなら僅かに回復量が上昇するG級でこと足りるので、家を買うまではG級で宿代を節約するのが一般的だが、今は非常事態なので普通の寝具があるC級宿屋に泊っている。

家にも級ランクがあり、級が高い家だとレギオンの拠点や、宿屋等の個人商店として機能させることも可能だ。しかし、今日始まったばかりのゲームなので、個人商店として機能している家も、レギオンの拠点として機能している家も、まだ存在していない。・・・はずだ。ひょっとしたら、ハム辺りは既にレギオンを立ち上げてレギオンの拠点となる家も買っているかもしれない。

「とりあえず飯でも食いながら、何が起こったかをゆっくり理解しよう」

そうギガントが言い、俺達5人は宿屋の食堂に向かった。

D級からは宿に食事が付くので、旅行等で長期間ログインできない状態になる前に、D級以上の宿屋に泊ることで餓死を回避する、という事もできる。ログインしていない間、どうやって食事を取って

いるかは謎だったが、どうやらC級では自分から食堂に赴いて食事を取るようだ。

食堂に到着すると、適当な席に座って料理が来るまで適当に話して待つ。

この料理は宿屋毎に決まっていて、C級では夜はパンとスープとサラダ。D級では朝昼夕全ておにぎりらしい。

適当に宿屋で出る料理の話をした後、ギガントが本題を切り出す。

「で、料理の話は置いておくとしてだな、このログアウトできない非常事態をどうやって打開するか、だが、これはおそらくあの声の言っていた通り魔王を倒すしか無い、と考えるのが妥当だろう」

「でもなー、ワイらが参加してたcβに魔王って存在は居らへんかってん。荒野にゴ布林王とかちよつと離れた山に火竜の王とかはおったけど、多分違うしなあ」

「うんうん。となると、この大陸に魔王はいなくて、港町から船で魔王のいる大陸へ行く、って事も考えられる。船もあるってことは確認してるし」

「ただ、船は家並に高い。小さい船くらいなら安いが、それだと別の大陸にまでは行けないと思う」

「ま、そんな訳でしばらくは魔王に挑むための準備だな。船に装備にレベル上げた。っと、料理が来たようだな。どうやら嗅覚もあるみたいだ」

ギガントは「ほら」と厨房の方を指さす。

厨房の方を見ると、ふくよかな女性が料理の乗ったトレイを器用に5つ持って運んできていた。

本当の人間のように見えるが、NPCかプレイヤーかはわからない。

「はい、これが今日の夕食だよ。味わって食べな」

料理の乗ったトレイをテーブルに置き、厨房に戻ろうとした女性にギガントが声をかけて引き止める。

「あー、あんた、ここで働いてるのか？」

「はあ、何を言うかと思えば。・・・この『太陽の羊亭』はね、私フレダ・アトマックの店さ。十数年前に建ててからずっとね」

「十数年前か・・・どうも」

「ああ、食ったらそのまま部屋に戻ってくれて構わないよ。皿はこっちで回収するからね」

そう言っつてフレダと名乗った女性は厨房に戻っていった。

「・・・NPCも人間らしくなつてやがるな。ひよつとしたら俺達は異世界に迷い込んだじまつたのかもしれん」

「ゲームみたいにメニユー開いたりできる異世界、ね」

「ひよつとしたら、だ。ついさつき響いた声も、別の大陸のお姫様かもしれないな」

この大陸には国というものは存在せず、大陸の中央に『アガレス』という名の都市があるだけだ。

その別の大陸のお姫様に呼ばれたってことなら、たちの悪い悪戯としか思えない。

なんせ、1人や2人ではなく、おそらくソーマジをプレイしていたプレイヤーのほとんどが呼ばれたのだから。

出された料理を食べながら明日はどこに行くかを話していると、エレアがふと思いついたように喋る。

「そついや、公式掲示板ってまだ使えるんか？使えるんやったら、それで助けを呼べるんじゃない？」

「そうだな、とりあえず確認してみればいいだろう」

ギガントはパンをかじりながら画面を開き、公式掲示板を見ようとする。

「お、開けるな。【誰か助けてください！】【助けを呼ぶスレ】・・・皆考えることは似たようなもんだな」

「ソモグ。でもさーでもさー、外部からも閲覧できるって言っても、SOMOって一般人にはあまり知られていないゲームでしょ？知ってる人はゲームやってるだろうし・・・期待できないんじゃない？」

「他には、VR機から出てこない俺らを心配した人が通報するってのもあるな。VRカフェなんかは、時間が過ぎたらロックは解除されるはずだしな」

「ワイとリンゴはVRカフェからSOMOやっとなるけど、まだ救出されてへんで・・・ってあちゃー、これも期待できんわな」

ギガントは「やっぱり魔王倒すしかないようだ」と額に手を当て椅子にのけぞっている。

そこからは、レベルアップのために明日は『トカゲの湿地帯』を少しずつ奥に進みながら狩るという話になったが、もし死んだらどうなるのかは分かっていないので、今日のように奥の奥まで踏み込んで死んで戻るのではなく、『トカゲの湿地帯』はある程度奥に進ん

だら来た道を戻ることになった。

『トカゲの湿地帯』も『動物の森』と同じく、奥の奥には『竜の洞窟』という所が続く道があり、そこは『魔獣の森』以上に強力なモンスターが出る危険な所になっている。

話が終わり、料理を食べきった後部屋に戻ろうとした所に、フレダさんから声をかけられた。

「ああそうだ、部屋に風呂が付いてるけど、男女別じゃないだろう？ 嬢ちゃん達は部屋で入るといいだろうけど、野郎共は通路の奥の青い暖簾のれんの浴場使っておくれ」

そう言っただけでフレダさんは他の宿泊客に料理を出しに行った。

宿の廊下でリンゴとウィンディと分かれてギガント達と浴場に向かうとする、とそこでリンゴに腕を捕まれた。
凄く良い笑顔で。

「じゃあ今から1時間くらいはお風呂タイムにするから、ギガントとエレアはそれまでそっちの浴場で時間潰しててね！」

ちょっと待つてください。リンゴさん、俺、男。今は魔法少女だけど、変身解けば男に戻るから。

そう言おうとしたところでリンゴと俺の間にエレアが割って入ってきた。

「いや、リンゴ、何言ってるの？ タタリは元は男なんやから当然ワイらと浴場に行くべきやろ」

「えー」

「エレア、殺すぞ」

「なんでやねん!？」

「そ、そくだよ、俺は元は男なんだからエレア達と浴場に行くよ」

『変身解除』をして男に戻るために、スキル画面を開く。
しかし――

「・・・『変身解除』のスキルが無い」

魔法少女のスキル画面を見ても、『クリアブレット』の下に『ヒール』があつたのは良いが、『変身解除』というスキルは無かつた。
『変身』を使つたのはTATARIだから、もしかしてTATAR Iの方か?と思つたが、TATAR Iのスキル画面にも『変身』はあれども『変身解除』は無かつた。

「ひよつとして、不具合つてやつかな・・・?」

オンラインゲームでは、稀にだが有るはずの物が無かつたり、逆に無いはずの物があつたり、というような、開発チームが想定していた通りの仕上がりになっていないことがある。

こついつた不具合は、公式ページから不具合報告メールを送つたり、公式掲示板に書き込んだり、GMに連絡することで対応してもらえ
る。

しかし今はログアウトできないので公式ページにはアクセスできず、GMはまだこのゲームでは見たことが無いし、公式掲示板は今現在救助要請でまともに機能していない。

「お、不具合か。残念だったな。ログアウトもできないから強制的な変身解除もできないしな」

「よし」

「いや、ウィンディ？『よし』ちゃうがな。」

「殺すぞ」

「だからなんでやねん！」

ログアウトはできないため、運営とも連絡がつかないし、強制的な変身解除もできない。

という事は、だ。俺はログアウトできるまでの間、ずっと魔法少女ってわけか。

冗談じゃない。

「あー、俺、風呂はやめとくよ。そろそろ時間潰してくる」

「ダメ」

「そーだよ！体は清潔にしとかなきゃ！」

ウィンディはエレアに短剣を突き付け、リンゴは俺の腕を掴む。

二人とも目が本気っぽい……。エレアは両手を上げて後ろに下がり、俺は部屋の方へ引きずられる。

俺は頼みの綱の後ろのギガントに助けを求めようと振り返るが、ギガントは一言。

「タタリ、無駄な抵抗はやめとけ。あんなったら俺では止められん」

「え！？ちょ、ギガント！？」

エレアも苦笑いしつつ、「今の内に慣れといった方がいいんとちゃう？」とまで言ってくる。

「そういう訳だ。行くぞ、タタリン」

「う、うわー！」

女って怖い。そしてログアウトできるようになったら即行で不具合報告しよう。

そう思いながら俺はリンゴとウィンディに部屋まで引きずられていった。

そして、「慣れる」なんてことがないように祈る。

2 (後書き)

次回、風呂(予定)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5405y/>

Sword Of Magic Online

2011年11月30日12時47分発行